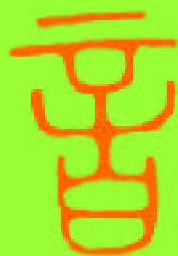


京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター  
所報

第2号 2002年3月

ISSN 1346-4590



Newsletter  
of the  
Research Centre for Japanese Traditional Music  
Kyoto City University of Arts

No. 2 March 2002

---

京都市立芸術大学  
日本伝統音楽研究センター  
所報

第2号 2002年3月  
ISSN 1346-4590

---

目次 CONTENTS

所長対談 梅原 猛 氏にきく .....	3
The Director Interviews Japanologist UMEHARA Takeshi	
開所記念シンポジウム「今、なぜ日本伝統音楽か」実施報告 .....	18
Report on the Symposium Held in Commemoration of the Founding of the Research Centre: "Why Japanese Traditional Music Now?"	HIROSE Ryohei
エッセイ	
Essays	
現代邦楽番組誕生のころ.....	長廣 比登志 22
The First Broadcasts of <i>Gendai Hoogaku</i> , Contemporary Works for Japanese Traditional Instruments	NAGAIRO Hitoshi
私の2001年夏プロジェクト	
- IAML Périgueux 大会に参加して - .....	高橋 美都 24
My Project for Summer 2001: Participating in the IAML Annual Conference in Périgueux	TAKAHASHI Mito
香港2001 PNC年次大会に参加して	
- 唐楽研究の今後 - .....	スティーヴン・G・ネルソン 25
The 2001 Annual Conference of the PNC in Hong Kong: A Glimpse of the Future of Research on <i>Toogaku</i>	STEVEN G. NELSON
センターニュース .....	30
Centre News	
日本伝統音楽研究センター 概要 2001.....	50
Guide to the Research Centre for Japanese Traditional Music, 2001 .....	52
編集後記.....	55
Editorial	

---

Newsletter  
of the

**Research Centre for Japanese Traditional Music**

Kyoto City University of Arts  
No. 2 March 2002 ISSN 1346-4590

---

## 梅原 猛 氏にきく

日時：2001年8月22日（水）14:00-16:00

場所：都ホテル（京都、三条蹴上）談話室

聞き手 廣瀬 量平

進行 長廣 比登志・Steven G. NELSON

記録 高橋 美都

日本伝統音楽研究センターと国際日本文化研究センターの創設をめぐる

廣瀬 梅原先生にはいろいろとお伺いしたいことがたくさんあります。

梅原 今日は何を話したらいいのかなあ。何も支度していないけれど。

廣瀬（2001年版の日本伝統音楽研究センター概要刷り見本 日本語・英語版を手にして）これが我々の伝統音楽研究センター概要です。梅原先生も関わられた世界文化自由都市会議での趣旨が結実してコンサートホール建設なども実現し、我々のセンターもできたと言えます。その後計画が少しづつ煮詰まって今日に至ったわけです。いろいろお世話になりました。

梅原 もう忘れてしまっているけれども。

廣瀬 ある人いわく、国道9号線をはさんで、北に日文研、南に芸大。

梅原 悪く言う人は「梅原は二つもお城をつくった」などというけれども、そんな気持ちはなかったな。芸大はあの場所にしたかったけれども、日文研は偶然なんだ。意図してもっていったわけではないよ。

廣瀬 副市長の中谷さんは、日文研と芸大で西山文化といっておられましたか。

梅原 京大の工学部も来て、いよいよ西山文化は栄えますよ。それには私は関わっていないから、誤解しないように（笑）。

梅原家、住まいのいわれ（西山と東山）

廣瀬 西山と東山といえば、先生が今お住いになっているあの若王子のお宅は、足利將軍義政が銀閣寺を作る最初の予定地であったとか。まかり間違えば、先生のお宅は銀閣になっていたのですよね。

梅原（都ホテルから見渡しながら）あそこですね。見えますよ。三角の屋根が見える神社のむこう側の家。あそこです。私の所は山寄りで、もうその上には人家はないのですよ。

廣瀬 修行場の滝がありますね。

梅原 そう、猪や狸や狐が出てきますよ。人間の住むところではないと思っているんですよ。自分たちのところに人間が侵入してきたって。

長廣 聞くところによりますと、和辻先生のお宅であったとか。

梅原 和辻さんが大正15年から昭和9年までいたんですよ。助教時代。横浜の三溪園を作った原三溪の番頭さんが三溪園にならって私の家を作ったんですよ。番頭だから社長には遠慮したでしょうけれど、三溪の思想はだいたい受け継いでいます。景色の良い所を選んで、建物は余所から持って来るんですよ。建物は伏見あたりの民家というか武家屋敷だと思うな。もう一つは妙法院の茶室をもってきたのですけどね。今だったらもってくるのはえらいことだけれども。家全体



梅原 猛（うめはら・たけし）

国際日本文化研究センター顧問。哲学者・古代史研究家。大正14年3月20日、宮城県生まれ。

昭和23年京都大学文学部哲学科卒、立命館大学教授、昭和47年京都市立芸術大学教授、昭和49年京都市立芸術大学学長、昭和62年国際日本文化研究センター所長（初代）を経て現職。日本文化デザイン会議代表、日本ペンクラブ会長、日本ユネスコ国内委員を歴任。

昭和49年「水底の歌」により第1回大佛次郎賞、昭和61年「隠された十字架」で毎日出版文化賞、昭和62年「ヤマトタケル」で第15回大谷竹次郎賞、平成4年NHK放送文化賞を受賞、同年文化功労者に選ばれる。

著書に「哲学する心」「地獄の思想」「黄泉の王 - 私見・高松塚」「ニヒリズム」「羅漢」「仏教心とかたち」「日本人の『あの世』観」「海人と天皇」「『森の思想』が人類を救う」「自然と人生 - 思うままに」歌舞伎原作「ヤマトタケル」「オグリ」他多数。

が茶室みたいなものですよ。庭石や灯籠は古いものをいろいろなところから集めてきて。時代は一番新しいものでも、徳川初期ですよ。全部古い物を集めて作ったんです。それを大正6年から12年頃まで住んで番頭さんが亡くなったあと、三溪の娘さんと和辻さんの奥さんが女学校

の友達だったので、その縁で和辻さんが京大の助教授になった時に譲ってもらったそうですよ。そのあとに、おもしろい奇人である、岡崎桃乞という人、私の親戚で、家内の母のまたいところですが、その人が住んでいたんですよ。子供がなくて空き家になっていて、親戚に入ってもらいたいということで、その頃、費用の工面は大変だったけれど、何とか都合して入ったのです。今から見れば大変な面白い物だったと思うんですけど。庭師の人がやってきて言うには、あそこは自然の水が湧くんですよ。自然の水で庭園ができるのは、東山沿いでも、そうたくさんはないです。5ヶ所ぐらいしかないですよ。そういうところには大納言級の人が住むんですよ（笑）。私は大納言かな？（笑）鹿ヶ谷はあそこですから、だいたい陰謀をはかるところなんですよ。

長廣 俊寛ですか。

梅原 しかしまあ、東山も西山も支配するという、そんな意志はないんですが。（笑）  
廣瀬 あのお庭の池さらいはなさったのですか？

梅原 池さらいしたんですが。

廣瀬 何かいきましたか？

梅原 玉鏡池という池で、弁天さまが祀っ

てあったみたいで、江戸時代のお金があったみたいですよ。実際に残ってたんですね。出てきましたよ。

廣瀬 大鰻とか主はいなかったんですね。

梅原 ええ。まあそういうところです。

廣瀬 この東の端から、西の果てまで通っているいろいろしたんですね。

梅原 まあそれはともかく、これ(日本伝統音楽研究センター設立)はおめでとございます。ほんとうに。

### 廃仏毀釈の問題点

廣瀬 ところで、日本学という言葉はいつ頃からでてきたのでしょうか？

梅原 自然に生まれたみたいですね。

廣瀬 そのようですね。いつのまにか、梅原日本学なんて言葉がでちゃいました。日本伝統音楽研究センターは、日本学の音楽部門みたいな感じのところを目指したのですが。

梅原 あのね。今、靖国問題が起こっているけれど、つくづく思いますけれどね、やっぱり廃仏毀釈は今でも続いているんだ。

廣瀬 ああ、廃仏毀釈、明治初期の

梅原 あの廃仏毀釈ということは、日本の文化については大変まずかったですね。たとえていうと、大原のようなところに行ってもそうですが、昔は天皇をはじめ皇族はみんな、声明が歌えたんですね。そして法事には必ず声明をやったわけですね。声明という中には、古い古いいわゆる東洋の芸術が結晶しているわけだな。そういうものはやっぱり、皇族としての教養の条件だと思いますね。天皇になれる人は一人しかいないから、あとの人の多くは坊さんになったわけですね。あちこちの門跡寺の。門跡になれば余計、教養が必要で、声明なんかはみんなできたんですね。これは大事なことです。それを明治以降に断ち切ってしまって、廃仏毀釈ということで皇族で坊さんだった人が還俗して兵隊さんになったんだなあ。陸軍の大將とか中將とか。とんでもない

ことをやったんですね。

廣瀬 それはやっぱり、キリスト教が入ってくるから日本の宗教があいまいな神仏混淆を切りはなして理論武装したんでしょうか？

梅原 いや、そんなんじゃないと思う。つまりそれは、やはり国学でしょう。明治維新の原動力となったのは国学。僕は国学つまり神道の仏教に対する復讐のような気がするね。復讐の思想だったと思うんですね。だから仏教が入ってきて以来、神仏は仲良くやってきたのだけれども、新しい仏教、つまり特に浄土宗と浄土真宗は神道を排斥していたんですね。そういう仏教の側にあった神道への排斥という下地があって、それが国学つまり神道の側で逆に仏教の排斥になってくる。それが明治維新の原動力になったということがいえる。だから明治6年の廃仏毀釈がまだ続いていると僕は思ってるんですよ。それがわかるのは、天皇さんの葬式ですね。昭和天皇のお葬式に行ったんですけれど、あれは、実にあっけないです。葬式というものはやっぱりひとつの文化の一番深いもの、その文化的伝統がすべてそこに凝集すべきものです。ところが、神道の方式でやったから、声明のような仏教的なものを退けて、新しい儀式を作られたんですね。神道にはもともとそういう儀式がなかったんですから。あれは明治時代に作った非常にチャチなものです。ええ。これは私はもう日本文化にとって、どれほどの損失だったろう、はかりしれないと思いますね。いま声明などの文化の名残が僅かに残っているのは、あの「歌会始」のあの調子でしょう。僅かに残っているだけだと思う。これは音楽として、決定的に日本人の芸術的感性をダメにしたものだと、私は今そうつくづく思うけれど。

廣瀬 となると、もうちょっと発展させて考えると、靖国神社はどう考えたらいいのですか？やっぱり神道ですか？

梅原 神道でもあれはやっぱり新しく作ら

れたもので神社神道ではないんですよ。国家主義が新しく作った神道で、そして文化的には非常に浅いものですよ。私は天皇の葬式で痛切に感じたなあ。これはやっぱり日本の各宗派を動員して仏教で行ったら、ヨーロッパ人も世界中の人も感動したと思うんですよ。世界の人には日本の文化は古いと思うんだろうけれどね。本当にチャチでね。神道にはそういう伝統がないんですよ。葬式の伝統はずっと仏教にまかせてきたから。神道にはそういう伝統が失われているんですよ。葬儀というものは非常に文化的なものです。ところで、僧侶に結婚を奨励したこともまずかったなあ。かつてキリスト教を防ぐために檀家制にしたことがあって僧侶の生活は安定した。その上明治になってからは結婚を命令したみたいなもの。そのねらいは仏教を否定するためのようなものなのに、仏教徒も乗ってしまった。結婚して子供を作って、寺院はほとんど父子相続になってしまい、結局仏教の宗教的精神は失われてしまった。結婚を奨励したのは仏教をつぶそうと思ってやったのだから、そういうことを考えなきゃいけないと私は坊さんにはいうんですよ。長い間仏教が養ってきた文化伝統は絶えてしまった。キリスト教の背後には大きな文化があって、芸術もそれとともに栄えて現代まできたわけだけれど、日本は残念ながら150年前に仏教の伝統を廃仏毀釈で、断ったというふうには僕はこの頃だんだん、思いはじめたなあ。

廣瀬 今のお葬式のことですけど、古事記なんかを読むとヤマトタケルの葬儀は「しのびごと」とか「もがり」などをやって、その時の歌なんかも残っておりますが、あの頃はずいぶん入念に儀式をやっていたように思うのですが。

梅原 やってたでしょうね。それは結局平安時代にそういう儀式をほとんど仏教が行うことによって、仏教側に移ってしまったんだね。仏教でも奈良仏教に葬式はないんですよ。奈良仏教の人は葬式が

ないことを誇りに思っているのですから。そこで浄土教は死の儀式をひきうけて、日本全体で死の儀式を非常に熱心にやった。また曹洞宗という宗派も死の儀式を非常に熱心にやったから広がったと思うんだな。同じ禅宗でも臨済宗はあんまりやらないですよ。

廣瀬 曹洞宗は日本の仏教で信者数が多い宗派ですね。

梅原 それはやっぱり死の儀式、引導を渡すのが曹洞宗は得意なんですよ。死の儀式の中には声明をはじめ、非常に高い文化があった。結局その文化は続いているのだけれど、国家がそれを崩したという形になっているんだなあ。

#### 怨霊とアイヌの信仰をめぐる

廣瀬 ところで先生のトレードマークのようになっている「怨霊」ですね。アイヌのイヨマンテも死者を祀っているのでしょうか？殺した熊を祀って。

梅原 怨霊の鎮魂ということとは非常に大事な宗教儀式。まあ葬式も同じですね。霊というものは祀らない限りはやっぱり怨霊になりますからね。だからそういう怨霊鎮魂儀式が基本だと思います。イヨマンテというのは、やっぱり熊を殺すわけですからね。そういう熊が「まれびと」つまりお客さんとして人間界にやってきた。そのお客さんは「土産」をもってきた。身を捧げるそれが「みあげ」でしょう。その土産をもらってまた、あの世に帰してやる。それが儀式ですから、あの世に帰さないとそれがまた怨霊になる。次に来てもらえないという大変な儀式だと思うのですよね。そういう儀式は日本の神道および仏教の基本にあるでしょうね。やがてだんだん仏教がそれをやるようになった訳ですね。怨霊鎮魂の儀式は主として真言宗、それから葬式の儀式は浄土宗と。真言と浄土は一番日本に広まったと思いますよ。禅の方では曹洞宗が手がけることによって広まったと見ているの

だけれど。

廣瀬 やっぱり真言宗というのは日本に仏教伝来以前からあった山岳信仰や修験道、それから民間信仰のようなものと、とても合うところがあったのでしょうかね。

梅原 やっぱりそういうものを利用して吸収したようなところがあったと思うな。

廣瀬 護摩を焚いたり、呪ったりそれから調伏したり。

梅原 やっぱりそれ以前のアイヌだってあれは火の神なんだよ。火の神というものは人間をあの世界に連れていくんだ。そういう信仰が実はアイヌに残っているんですよ。それはやっぱり不動明王の信仰と結びついてくるな。真言系では火の神の信仰が土台になっているんだね。

#### 木彫仏にみられる神仏混淆

梅原 今、京都造形芸術大学にいる井上正君の説ですがね、日本の仏像は圧倒的に木彫ですね。木彫は今までの仏教史では、平安時代になって真言や天台が支配的になる頃に主流になると言われていました。井上君はその前に行基仏というものがあったという。行基仏はほとんど100%白木の木彫なんです。そしてその行基仏は、行基および行基集團の作ではなく平安時代に作られたとされていたのだけれど、井上君はそれを見て、行基仏には大変な特徴があるというんですね。白木であって、形相はみな異相をしている。鼻が大きかったり口が曲がっていたり頭が大きかったり全部異相をしている。しかもその行基仏は関西に多いのですが、行基仏のあるところには必ず神像、かみさまの像がある。そして未完成としか思われな。わざと未完成にしてある。たとえば、目が彫っていない。ほかのところはきちんと彫ってあるのに。目を彫っていないんですよ。それから後ろが全く生でわざと未完成にしてある。これはもう行基および行基集團そのものであるとしたのですが。

廣瀬 それはやっぱり円空なんかにも繋がってくるんですか？

梅原 ええ。いま大体その説が有力になってますよね。そういうことはやっぱり当然なのです。ところで中国からのたとえば鑑真の招来仏は金銅仏が乾漆と塑像なんです。木彫はないのですよ。よく考えてみれば中国にはそのころ大木はなかったけれども日本にはたくさんある。それに木には神様が宿る。木彫というのは、神に仏が新しく宿る。ですから神と仏が融合したわけだな、という風にとらえることができ、それは日本の精神史として非常によくわかってくるのだな。井上君の説だとその土地土地の発展が非常によく見えてくる。神仏混淆が木彫の仏でできたという。井上正は木彫の研究者としても非常に優れている。そういうところからも、神道的なものや仏教的なものが出会ってくる。真言密教の思想などもそうだと思う。真言密教の思想の一つは森の思想を背景としていると思う。

長廣 その神像というのには道教などの神ではないのですか？

梅原 いいえ、もともとの日本の神ですね。道教は入っていません。ごく自然なものだと思います。木の中に神霊が宿っているという。日本人にとってごく理解しやすい素朴なものだと思いますよ。

#### 巨木と橋の思想

廣瀬 木について、先生は森の思想とおっしゃっていますが、たとえば三内丸山とかから最近出土した木の柱の一部など、やっぱりあの高い塔を建てたりする伝統は今日でも諏訪のおん柱祭とかに残ってますね。それも縄文とのつながりを感じるので。

梅原 そうですね。

廣瀬 あの三内丸山の柱は建物だったのでしょうか、それともただ柱だったのかもしれない？

梅原 私はそう思っています。みんな建物

だというけれど、あれは6本の柱ですよ  
やはり。北陸の真脇遺跡は10本の柱を立  
てている。木を半分に切って外側にサー  
クル状に並べる。直径が10メートルぐら  
いの、これはおそらく神聖なる空間を示  
すもので、やっぱり神様がおりてくる、ま  
た人間の霊が神様に憑く、天地が一致す  
る、そこで人間と神が合体する。そうい  
うシンボルだと思いますね。

廣瀬 何か天に昇っていくイメージがある  
のでしょうか？

梅原 天から神様が降りてくるのでしょ  
う。人間の霊も登っていくんですね。ええ。天  
橋立は昔はやっぱり水平が垂直だった。  
そのように丹後風土記にありますからね。  
神が降りてきたり人が登ったり。

廣瀬 たしかに能楽堂には松の木が必ず描  
かれてあるますね。

梅原 橋掛りのようなものが垂直に立っ  
たような、そんな感じなんではないか。

廣瀬 だから、水平は垂直だ。沖縄のニライ  
カナイでもそうですよね。

梅原 ええ。

廣瀬 水平線にみえた雨雲が、やがて頭  
の上に来て雨を降らせる。水平と垂直は置  
き換えられていると言えますね。

梅原 橋掛りの思想もこれは他界からくる  
のでしょうか。

長廣 それが花道になるとがらっと変わ  
りますね。歌舞伎になると現世的になって、  
この世の道となるんですね。

梅原 でもどっかに花道にも名残があるん  
じゃないかな。道行きなどそうですね。  
やっぱり道というものはどこかで現世の  
道とあの世へ行く橋だという意味もある  
のではないかな。

#### スーパー歌舞伎 ヤマトタケル

廣瀬 先生がお書きになったスーパー歌舞  
伎ヤマトタケルにもそういう花道の使い  
方はあったのでしょうか？もっともあれは  
宙乗りで本当に空に舞い上がってしまう  
わけですが。白い鳥になって。

長廣 猿之助さんが気持ちよさそうにあ  
がっていく。

梅原 それぞれ。あれは猿之助のケレン、つ  
まり早変わりと宙乗りがなければあの芝  
居はできないんです。

廣瀬 そりゃそうです。

梅原 だからスーパー歌舞伎の難しさはそ  
こにある。必然があればいいのだけれど、  
猿之助にとっては必然だからびったりだ  
と思って書いたのだけれど、どうも、あ  
れをやらないとお客が喜ばないので、必  
然性が薄くてもそれをやらないとお客が  
満足しないというところが難しいんだ。  
(笑)

廣瀬 先生のもう一つのスーパー歌舞伎オ  
グリはいかがですか？

梅原 オグリはね、軽業とかありますから、  
筋の必然もあるからいいのだけれど、そ  
れ以外にもそういう場を作るんですよ。  
無理して。スーパー歌舞伎の特色が欠点  
にもなる。書き様がないいわなあ。もしそ  
うなると忠臣蔵にも宙乗りを使わなくて  
はならなくなる。(笑)

廣瀬 何か、「後日の忠臣蔵」をお書きにな  
ればそういう場面が作れますかねえ。大  
星が天上に行って判官に仇討の報告に行  
くとか。話はまたヤマトタケルに戻りま  
すが、オトタチバナ姫を二人作られたり  
した大胆さがおもしろかったのですが。  
ヤマトタケルに亡ぼされたイブキの神様  
というのが土着的な日本人たち、縄文  
人もかもしれない。要するに大和朝廷に滅  
ぼされ征服された人々を代表している。  
そのイブキの神様が白いイノシシになっ  
て出てくるという。

梅原 いろいろ廣瀬さんと縁があつてなあ。  
はじめ僕がやったのはモダンダンスのア  
キコ・カンダの舞踊作品、柿本人麻呂。は  
じめなかなかできなくてなあ。困って廣  
瀬さんに、手伝ってもらって、アキコ・カ  
ンダのところに行って、ビデオを見てい  
たんだ。ああ、これでいいこれでいい！  
と。(笑)

廣瀬 あれは観世栄夫さんが失脚して石見



の海に沈められる人麻呂を演じたんですね。

梅原 あれはよかったね。どうもね、僕は一番最初に書いた作品が一番いいみたいで、アキコ・カンダの次に書いた作品は演出も少し残念で、やっぱり人麻呂がよかった。猿之助もやっぱりヤマトタケルが一番いいねえ。あれだけのものができるんですね。

### 狂言 ムツゴロウ

廣瀬 このあいだの狂言ムツゴロウの再演は今週ですね。あれはこれから見せていただきます。

梅原 切符は3ヶ月前に手配しても悪い席しかとれなくて。

長廣 去年の国立能楽堂もすぐ売り切れてしまいました。

廣瀬 あれはやっぱり、諫早のムツゴロウの話ですか？

長廣 タイムリーですね。

梅原 あれね。現実が芸術を模倣するというけれど、あれはまさにそうなんだなあ。あれを暮れにやったら1月には諫早でノリがとれなくなったし、台本にはゴルフのことがあるのだけれど、その直後（首相の）森さんがゴルフのことで失敗したりして、まさに現実が作品を後追いついてるんだ。（笑）

長廣 先生としては痛快でございますね。

梅原 痛快ですね。だから芸術は無意識に作ったもののほうがいいんじゃないかなあ。あまり意識して作ろうとしたらうまくいかない。ヤマトタケルも無意識にできた。

### ふたたび ヤマトタケル

廣瀬 まさに血湧き肉躍るというか。  
梅原 廣瀬さんも言うけれど、クマソとかエゾとか史観、歴史観が入っているのですね。日本というのは縄文と弥生で、縄文人と弥生人とが融合してできた。日本

を作ったのは弥生人だった。弥生人がやっぱり縄文人を征服したと。縄文人は大変文化が高かったという、それが僕の持論で、まああれを書いたんだけど。エゾやクマソに大変同情して書いているのね。同情が強すぎてね。エゾやクマソのセリフがものすごくいいんですよ。猿之助がヤマトタケルを演じていて、何か悪いことをしているような気になるといってましたよ。エゾやクマソにいいセリフがあることはありがたいけれど、このままじゃ困るから、私にもいいセリフを書いてくださいよといったんだ。それでまあ、最後の死ぬ場面では

廣瀬 あれはいいセリフです。

梅原 私の心は天駆ける心だという。そして私は子供の時から、ちまちました金や名誉を追いかける人と違って。私はいつも心は天高く飛んでいた。とそういうセリフを作ったわけで、それでやっとバランスがとれたみたいだな（笑）。だから、エゾやクマソは決して悪い人ではないけれど、それは日本を統一するためにはやっぱり必然であった。また同時に親父さんとの対立によって体制に利用された。まあそういうひとつの英雄として書いた訳ですね。イブキの神も単なる悪役ではなくて、縄文ですからね。私はやっぱり思い入れが強いんですよ。征服された方に。

廣瀬 それがよかったんじゃないですか。それから、ヤマトタケルは単なる征服者ではなくて、自分もそのことで心に傷を負っているという。

梅原 それはそうそう。単なる英雄は私は好かんのですよ。オグリでも「ロマンの病」という言葉を僕は作ったのだけれど、そしていろいろ。たとえば結婚でもいろいろなることがあるのですよ。そのロマンの病が悲劇を生んで、そしてまた、あれはまあレブラですな。「がきやみ」という。非常に苦労してロマンの病から癒えて、みんなでロマンを見る。夢をみんなで見ようと言うところだなあ。それは僕

の若い時の精神状態を表現しているといってもよい。まあロマンの病にかかって、いろいろあって苦しんだ。そしてみんなで夢をみようということになって、芸大を建てたり、日文研を建てたりしたんだなあ。やはり、精神のロマンだな。それであそこに入れたんですよ。僕は私小説は嫌いだから、ああいう壮大な劇のどこかに自分自身の影を入れておきたい。あの二つは成功していると思うな。なかなかそういうものは二度と書けないので困っているけれど。

ふたたび ムツゴロウと新作狂言

長廣 ムツゴロウが狂言の形をとるということは狂言がもともと風刺だから、時の権力への強烈なアイロニーですか？

梅原 はい風刺です。アイロニー、アイロニー相当強烈な。本当は小説を書いていたのだけれど、小説がなかなかできないうちに、千之丞さんが書いてくれと言ってきてね。戯曲で書いて大変評判になったのだけれど、ムツゴロウを題材に小説を書きたいの。その前に狂言ができてしまった。もう次の狂言もできて「クローン人間・ナマシマ」という。巨人の長嶋がモデルで、巨人は絶対優勝しなければいけないというのだけれど、松井などはみんなアメリカの大リーグに抜かれてしまって困ったということで、長嶋のクローン人間を7人作るというんだね。(笑)全部長嶋のクローン人間でやるのだけれど、オープン戦はすぐくつものだけれど、いざとなると俺が4番を打つ、俺がサードをやるとみんな言い出して喧嘩になって(笑)全然役に立たない。そういう話ですよ。クローン人間を作った博士がうんと金をもうけるんだなあ。最後には博士のクローン人間ができて、本当の博士が追い出されるという。(笑)

廣瀬 本当の博士よりコピーのほうがえらくなっちゃうんですか。

梅原 クローン人間の批判ですね。そうい

う今の時代には滑稽なものがいっぱいあるからね。それを手がけたらどうだろうと。

廣瀬 先生は「地獄の思想」よりももっと前に笑いの研究をなさっておられましたね。

梅原 今は笑いに戻ってますよ。笑いの研究を始めてますが、猿之助の歌舞伎は宙乗りを作らなくてはいけないけれども、狂言は自由ですからね。狂言の方が簡単にてきおもしろいと思うわ。

長廣 狂言は一部の人ばだんまりや中国の散楽のようなものをとりいれたりしていますが。

梅原 今の若い人はなんでもやるわな。茂山家はまたたいへんな人を揃えていますから。今は千作さんと千之丞さんを中心にしているけれど、これが全部子供や孫に受け継がれていくわなあ。後々ムツゴロウの問題が氷解したとしても結構おもしろい演目として残るように思う。

そしたらまた、このあいだ文珍さんと会った折、狂言まで作ったのなら落語も作って下さいよ。「スーパー落語」をやりたいんですって。落語はちょっと難しいなあ。

廣瀬 でも先生、先程もお話に出たように最初は「笑いの研究」をなさったのでしょ

う。

梅原 そこが私の原点です。

廣瀬 実存主義でみんな暗い話ばかりの時に笑いをやろうと。

梅原 その実存主義では自分は生きられないと思ったから。

廣瀬 悪役の笑いですか、

梅原 笑いの研究は4~5年、10年ぐらいやったかなあ。(NHKの)水谷慶一君と知り合ったのは笑いの研究をやっていたころだなあ。

長廣 ああそうですか。笑いの文化ですと日本を神代の昔から今日まで見ると、

廣瀬 あの天の岩戸の前で神々がやったころからね。

梅原 狂言というのはやっぱり江戸初期で終わる、新作はね。江戸の初期に幕藩体

制が整うと笑いで風刺することができなくなる。ある意味では現代に笑いがあるということは自由があるということになるなあ。

廣瀬 モリエールなんかにしても笑いには批判精神という背景がありますね。

梅原 また、ベタとした軍国主義の時代になると、こういうことを許さなくなると思う。今の笑いというのは自由な証拠だなあ。それにしても狂言を書くとは思わなかったなあ。芝居を書くとも思わなかったけれど。

### 劇作のきっかけ

廣瀬 あれはそもそもどうやって始まったんですか？

梅原 芝居を書いたのは芸大の学長をしていた時だなあ。学長をしていたときに、猿之助に頼まれてね。それもその、猿之助が「地獄の思想」を読んで、廣瀬さんといっしょだな。そして感動して会いたいというて、廣瀬さんと同じ頃や。

それから猿之助の歌舞伎を見続けたんや。「一本刀土俵入り」を見たけれども、なんともつまらん。いかにも劇がつまらんぞ、あんな劇ではあかん。新歌舞伎というのは、やっぱり歌舞伎の華やかな歌と踊りを加えて、しかも筋はギリシャ悲劇やシェークスピアのようにしっかりしていなければいけない。そして現代語で語るとそういうふうになんか書かなければいかんと言った。その助言を受けて猿之助がいろいろ頼んだ。ある作家にも書いてもらったけれど、とても上演できないという。「それは困ったなあ」といったら「いっそ先生書いてくださいませんか」と言ったんだが、それが全くの社交辞令だったんだ。学長在職中に歌舞伎を書くわけにいかないから、「学長を辞めたら書いてやるよ」と言っていた。学長を辞めたら、「先生、学長を辞めたら書いてくれると言ったじゃないですか」と言ってきたが、それも社交辞令だった。(笑)

猿之助としてみれば、どうせできやしないと書いていたらいいんだ。僕は二回も頼まれたものだから、学長を辞めた時に、ちょうど3月でした。入学試験の監督をせんならんのに、芝居を書いていたら遅れてしまってなあ。(笑)

廣瀬 ああそうですか。学長の任期が終わって普通の教授職に戻るとまた、入学試験の監督なんかもしなければいけないのですね。

梅原 そう、学長は辞めたから。監督せんならんのに遅れてしまって、まだ学長のつもりかと言われたよ。(笑)それでまあ、書いたんだけど。その頃古事記の現代訳をしていたんだ。その時にヤマトタケルのところを書いたら、これが大変美しい。すばらしいところだね。最後のところの白鳥になっていくところがまたいい。ふっと見たら、早変わりして始めて宙乗りで終わる。これはまさに猿之助にピタリじゃないかと思って書いたんですよ。書いたら猿之助が「これは大傑作です。先生はシェークスピアやワグナーのようです」とこれは社交辞令だとすぐわかったけれどね。(笑)

だけど猿之助というのは偉い人で、これはどうしても成功させなければいけないと、それから3年ぐらい準備して、オペラの演出をしたりして、そこでだいたいねらいがわかってからやりました。やっぱり大成功でしたね。あんな舞台は見たことないなあ。初日の舞台がものすごく熱狂的で。ほんとうにすごい。女の人はみんな泣いているんですよ。すごい熱があったですね。

長廣 あれは新橋の演舞場でしたでしょうか？

梅原 ええ、あんな舞台は初めてでした。長廣 決して間口の広くない舞台ですけど、ものすごく空間を生かされてましたね。

梅原 ものすごい人気で切符が買えなくて、大変だったですよ。本当にもう、まあ、何かまぐれ当たりだなあ。(笑)

廣瀬 ワープロのない時代に手書きで初稿なんか電話帳何冊分もの厚さでした。私は初稿から送っていただきました。

梅原 猿之助のセリフが長いだよ。台本は電話帳ぐらいあった。オグリの時には百科事典だと言っていたなあ。実際には3分の1位にして演じているんです。

後にイブキ山のところだけ独立してやったんですよ。「ヤマトタケル イブキ山の巻」として若い人がやったのですが、これはよかったですよ。悲しい場面の前には必ず馬鹿馬鹿しいところも作りました。これは劇の鉄則ですけれど。馬鹿馬鹿しい話やエッチな話を悲しい場面の前に入れるわけですね。オグリでは美濃赤坂あるいは青墓の宿場での女郎屋の親父などがでてきて使用人全員が出て大掃除をする群舞の場面など。あれはよくできていますよ。まったく滑稽な場面なんです。

僕は「地獄の思想」を書いて片一方で「笑いの哲学」を考えていたから、両方に関心もっている。笑いの場面があるから悲劇が生きるんですよ。

戸田伯爵より伝来の箏とブラームスにまつわる話

廣瀬 話は変わりますが、現在先生のお宅にあるお箏について、それが元大垣城主の戸田伯爵家からの伝来だということを知ったのですが、戸田伯爵の奥様が三条家のお嬢さんで箏の名手であった。結婚なさって、ご主人が駐オーストリア大使になった時に、彼の地で六段を演奏し、それをブラームスが聞いて、弟子に楽譜に書き取らせてピアノ譜にして、ブラームス自身が感想を書き残している。そういう由緒あるお箏が先生のお宅にあるわけですね。そのお箏の演奏を先生のお宅でお聴かせいただく機会があって、それがとても素晴らしかったのですが、どういう訳でお宅にあるのかをお話いただけますか？

梅原 さきほど話のあった、美濃赤坂の宿、そこに家内の母の里(稲垣家)があり、その本家が矢橋で大理石を扱っている金持ちであった。大垣の殿様とも関わりがあっておそらくお金を融通もしていたのであろう。戸田のお姫様がもっていた箏が売りにでたのではないかと。

ブラームスに聞かせた時の楽器であるとは断定できないが、その時代の超一流の楽器であり、伯爵家から来たことは間違いない。その後もう一度その箏の演奏会をやりました。

廣瀬 ブラームスという人はジブシーの音楽も記録をとって作品に取り入れれたりしていますし、ヨーロッパ以外の音楽にも関心があったのでしょうか。日本の音楽にも興味をもって感想を書き込んでいますので、もしもっと長生きをしたら、日本の箏のメロディーによるピアノ曲を書いていたかも知れませんが。

梅原 家内は戸田家から伝来したということは、母から聞いておりましたが、ブラームスの一件は知らず、調べた人から聞いて、そうだったのかと驚いたらしい。

廣瀬 ブラームスの資料にはちゃんと六段を聞いたと出てきますよ。

梅原 そのエピソードと楽器の年代はちゃんと合うんです。もちろん箏は複数持っていた可能性はありますから、断定できないですが。

#### 石笛と縄文文化

廣瀬 ところで先生、お箏の話から突然転調しますが、津軽三味線に縄文のにおいはしませんか？

梅原 おもしろいね。縄文といえばこのあいだ、廣瀬さんに石笛の話を書きました。あれはおもしろかったなあ。

廣瀬 それは恐縮です。先生は福井県の三方町にある縄文博物館の館長でいらっしゃいますね。あそこで話させていただきました。

梅原 廣瀬君の話は夢中になって話し出す

と何が何やらわからんことも多いが、あの時の話は論理整然としていて、今まで聞いた話の中では一番よかったなあ(笑)。大変おもしろかったですね。そして、縄文の音楽についての理論が一貫していて、演奏のほうも、どこかに縄文を偲ばせるものがある、よかったですね。長廣 廣瀬先生の研究は30数年来の成果ですので、先生の中には縄文の音が怨霊のように入っています。

梅原 さすがに30数年来の蓄積を見事に短時間でまとめて論理的に説明してくれましたね。

廣瀬 縄文人というのは昔、樺太もサハリンもみんな地続きだったころ、バイカル湖あたりにいた人が、北方経由でやって来て定着したのではないと言われていきますね。

実はバイカル湖の西側に翡翠のとれる山があるんです。そうすると巨木信仰のあるところ、たとえば三内丸山も真脇もみんな翡翠の出土品が出るんですよ。巨木と翡翠と縄文遺跡は何かつながっているような気がします。三内丸山では翡翠の石笛らしいものが出ています。津軽三味線やねぶたまつりなど北からの文化もまたそれに連なっているように感じのですが。

梅原 それは縄文でしょうね。

廣瀬 先生の中には縄文文化や黒潮の文化が渾然一体となっていっちゃるのですか？

梅原 北からか南からかは知らんけど、それらは一応基層文化ですから、自然と一体になっていて、そういう文化がやっぱりアイヌや琉球など、日本の辺境に残っていると考えますね。それから、稲作の文化、弥生の文化が後から入ってきて日本を形づくった。そう考えてますね。そういう縄文人は征服された民族として辺境に残ったのでしょうか。

北海道の伊達町に行ったのですが、縄文の遺跡があるのですが、貝塚があって、最近まで使っていたらしい。江戸時代ま

で。だいたい漁師ですから、近世まで縄文的基層文化を保っていて、その内容は相当程度高いものであったと考えるべきでしょうね。魂があの世に行ってまた戻ってくるような循環の思想をこのごろ少し信じるようになったね。

縄文の信仰で蛇は脱皮しますが、そういう象徴をみたのではないかなあ。死んだ人もまた再生してくるといような。一回は死ぬのだけれど、土産をつけてまた帰ってくる循環の哲学、それを見失っちゃいけないと思う。

廣瀬 そういう日本の思想は日文研などでも研究されていくのでしょうか。

#### 日文研創設時の理念

廣瀬 日文研をお作りになったころのことを、我々の研究センターのスタッフも知りたと思うので、お話いただけませんか。

梅原 日本文化、大学の日本研究というのはほとんど歴史学と国文学に限られる。それは日本研究の一部ですよ。日本の思想ですとか哲学という領域はほとんどない。そういう現状において、日本を総合的に研究する。しかもそれは、日本からだけ、日本人だけではダメだ。外国の研究者と協力しながらやらなければいけない。もう一つは日本研究者の視点が日本だけに限られるのもいけない。

日本研究を、総合的に、国際的にやらなくてはならないという2点がどうしても必要だということで当時の首相の中曽根さんに進言してOKをとったんだね。中曽根さんはもう少し国家主義的なものを作りたいと思っていたかもしれない。でも中曽根さんは偉かったね。僕に誰々を探れとは言わなかった。僕に全部自由にやらせてくれた。

今、靖国問題などを見ていると、日本だけで通用するような考えでは困ると思う。中国や韓国からの視点も考えて、あの戦争を十分反省できる、あの戦争を否

定しても十分日本には優れたものがたくさんある、そういう日本を解らせよう、そういう発想が根元にありますのでね。そうして始めて日本研究が国際的承認を受ける。その考え方は一貫しています。

廣瀬 範囲の広い、専門にとらわれない人をお採りになったようですね。

梅原 広く日本を見ることのできる人をたくさん採ろうとしました。右から左まで、右寄りの人も左寄りの人もいたですね。でも一つのイデオロギーに固まった人はやめようと思っていました。リベラルに自由にものを考えられる人には来てもらおうと。専門のこちこちの人もやめよう。まあ、やっぱり2つ以上専門がある人がいいけれど、私のように5つ以上あるのもちょっと困るね(笑)。

廣瀬 河合先生が2代目の所長に就任されるときに、1番バッターがホームランを打ってしまったので、2番バッターの自分はずることがなくなるとおっしゃいました。ご謙遜でしょうが。

梅原 そんなことはないですよ。河合君ももちろんホームランバッターですよ。

廣瀬 何も無いところから組織を作られたわけですけども、目的とか方法とか組織の作り方とか何かお話があるかと思うのですが。

梅原 (国際日本文化研究)センターは、あなたのところのセンターとは違うかも知れないけれど、専門を固定して採りませんでしたね。いい人があればラフな粹を使って持ってくる。そういうやり方でした。

廣瀬 人で採ったわけですね。

梅原 経済の人が3人おろうが2人おろうが、よいと思う人がおれば採ったわけだね。全体のバランスを考えながら。高橋和巳が生きている時言っていたのだが、そういうのは羅漢さん、羅漢さんはみんな顔が違うけれど一種の和ができる。研究所というものはそういうものだと考えた。羅漢さんというものはみんな変わっていて、どうしても使い物にならないものもある。

それと権力意識の強いものとかは見抜かなければいけない。学問が好きで変わっているヤツは結構だけど。

廣瀬 日文研のよい伝統は外から見ていてもよくわかりました。

梅原 芸大の学長は人事はできないから。日文研では哲学者の独裁ではないが、理念がある賢明な独裁者の選択が効を奏したといえるかもしれない。現在のセンターは梅原時代とはちょっと変化してしまったので、もとに戻さなければいかんと言っているんだけど。

廣瀬 だんだん、話がおもしろくなってきましたが、ネルソンさん、いかがですか。

#### 仏教音楽などへのアプローチ提言

廣瀬 おかげさまで、我々の伝統音楽研究センターも人数は少ないですが、現在はとてもよい感じでやっております。

梅原 (ネルソンに向かって)声明の研究をやっておられるのですか？

ネルソン はい。声明と雅楽を。

梅原 声明は天台ですか真言ですか？

ネルソン 今まではどちらかというと言真言の人々との関わりが強いのですけれども。僕は東京に居たものですから、東京の天台の人々とのつながりはあります。

梅原 京都では天台が盛んですし、声明はやっぱ京都が一番本元ですからね。大原など。

ネルソン そうですね。とにかく焦らないことにして少しずつ。

梅原 真言の声明はだいたい唐そのままですね。天台の声明は中国的なものと同風のもの両方あるんですよ。その和風のものの中にいろいろな言葉が入っていて、そういうものが、ほかほかしているんです。天台声明にはいろいろな要素があって、俗曲化したり、いろいろな言葉が入っているんですよ。それをちゃんとした採集をしている例があまりないような気がするなあ。天納傳中さんにいろいろ聞いたんだけど。思想的な研究がまだでき

ていない。音楽としては研究できているかもしれないけれども。

ネルソン それもまだまだという部分もたくさんあると思います。

梅原 仏教史の知識なども必要で、天台声明の中で和風化して日本の言葉が入っているところなんかを見ていると歴史の秘密が解く鍵が入っているような気がするんだ。

ネルソン 法会の中でも、いろいろな歴史の違ったレベルが同じ場で演奏されるのですね。

梅原 それからいろいろなバラエティーがあって、融通念仏に行く線と、天台に残るのがある。また、法然や浄土教に行く線もあって、その思想史、仏教史に詳しい人といっしょに勉強すると非常におもしろい研究ができると思ったなあ。天納さんが元気な内に習っておいたほうがいいなあ。

ネルソン そうですね。

廣瀬 私、今年2月にちょっと入院したのですが、天納さんと偶然同じ部屋でした。

梅原 天納さんが大原の声明についてはお詳しい。お弟子さんもいらっしゃるようだけれども、やはり天納さんの知識は群を抜いているし、何より声がいいし。

ネルソン また最近すばらしい研究をたくさんお出しになっておられますし、古い文献の翻刻にも力をいれておられます。

梅原 あなた、しっかり天納さんに聞いておきなさい。記録もしっかりとっておかないともったいないですよ。

ネルソン 実は今、ひとつの計画を模索しているのですが。

梅原 真言も大事だけれども、天台からは、仏教がどのように日本化していくかということが音曲の形で浮かんでくると思う。

中世までの念仏は口で唱えることを二次的なものとするものであったが、口で唱える念仏を最初に行ったのは良忍ですからね。あれは音楽、一種の音楽が念仏であったらしい。法然になると音楽を通り越して「ナンマンダブ」というだけの

念仏にしていった。しかし浄土教が確立する時にはまた音楽の要素が入ってきて、六時和讃などができる。六時礼賛というのは法然が念仏を広める上では非常に大切重要なものなのなんだ。文句は善導の文句なのだけれど、どういうふうに歌っていいかはわからなかったらしい。

はじめ法然の弟子の住蓮・安楽らは我流でフシをつけたいなあ。フシをつけたことがとてもよくて法然の浄土教は広まったらしい。広まる一つのきっかけは、美声で美貌の僧侶の音楽活動であったと言っていい。女性の心もつかんだそう。急速な布教の反動で法然は流罪になったりしたけれども。六時礼賛に本格的なフシをつけたのは室町時代らしい。それが今浄土宗に伝わっていますね。真宗の一番の経典は正信偈ですがね。関東でつけた音楽は坂東節といっているし、そういう音楽がどのように変遷したのか、やっぱり思想史とつながるんですよ。これは非常におもしろい問題ですね。

六時礼賛というのは文章として非常に美しい文章ですよ。この世の悲しみを歌いあの世の美しさを歌ってますね。音楽もそれぞれの時代で変化しているのだけれども、思想史とともに検討する必要があります。こういうテーマを是非研究してください。

ネルソン 大きなテーマですね。

廣瀬 (平成12年度委託研究「舞楽関係映像の記録作成」報告書を手にして)高橋さんですが、これは地方に伝わった舞楽の比較をするための写真資料集です。静岡とか新潟とかいろいろなパリエーションがあるんです。新潟の能生でどのように習得しているかの記録も入っています。

梅原 それぞれ違うんですか？

高橋 これからきちんと比較研究していこうとしているところです。

廣瀬 中央で行っていたものが、地方に伝わるとどのように変わり、土着化して浸透していくかというようなことを研究されるようです。

## 伝統音楽研究センターへの助言

廣瀬 我々は現在のところ、6人の研究スタッフにあとは非常勤の研究員で進めています。当初はもっと人的規模を大きく構想していたのですが、今のところこの陣容に落ち着いて、ようやく軌道に乗せようとしているところです。

梅原 もうひとつ、念仏踊りだなあ。これもやっぱり非常に重要なものだと思うんだがなあ。

ネルソン 実は、センター概要にも掲げていますが、音楽図像学というプロジェクトを始めようという段階にまで来ているのですけれど。そういったものを描いた資料を調べていこうと思っています。もちろん、描かれた場面から音楽史がどれだけ読みとれるかは難しいところがあって、どこまでできるかわかりませんが、

廣瀬 踊り念仏の様子を描いた物もあるわけですね。

ネルソン はい。一遍聖絵の有名な絵がありますがですね。そのへんの系譜については11月にはある研究者が発表してくださることになっているのです。

梅原 そうね、京都では四条道場に時宗の寺があったのだからね。四条河原町のちょうど、交差点だな。あのへんにすごい拠点があって、そういうところから出雲歌舞伎などが起こってきたのだらうね。祇園町の歌舞音曲もおそらく関わるし。時宗というのは江戸時代になると全部つぶれてしまうんですけどね。踊り念仏というのはものすごく大切だと思いますよ。

そういう研究をする時に、音楽の研究をする人だけでなく、広い見地からね。やっぱり思想史、宗教史などの研究者にも入ってもらわないと生き生きとはとらえられないと思いますよ。

やっぱり坂東節などは勇躍念仏して、喜ぶじゃないですか。それが踊りに出てくるのですね。時宗は室町時代には非常に発展するのに、江戸時代に入ると急速

に衰える。移住ができなくなった、移動の自由がなくなることが大きかったのだと思う。そこで浄土真宗に吸収されるのだけれども、時宗から浄土真宗に「吸収合併」になったときに失われたのは芸術性だと思う。時宗というのは芸術的な宗教ですなあ。

泉涌寺の中に浄土教の寺がありますけれど、そこでは今でも源信の念仏をやっています。ずーっとそのままいまだに伝わってきていると言っています。練り供養をやるのですが、狂言の茂山千作が振り付けをしたそうです。歌を歌っているのは非常に古いものを伝えているそうです。念仏をやっているおばあさんは何もそんなことは知りませんよ。練り供養の踊りの所作は聞いてみたら千作が最近振り付けたもので、ちょっとよう出来すぎていると思うた(笑)

長廣 そこはまた京都で、知らん顔して新しいものをとりいれて、古いものであるかのようにしてしまう、そういう面もあるのですね。

梅原 伝統というもののとらえ方は難しい。そのまま演じられずにいつの時代に創造者がでてきて、変えてもおるのですね。

廣瀬 古さをそのまま保存伝承するのと、そうじゃなくて、変えながら活力を保ち伝えていくことと

梅原 変えても民衆は何とも思わへん(笑)

ネルソン そういうことは歴史家としては非常に困ることですよね。新しいものが古くからあるように見えてしまうようなことは。区別がどこにあるか難しいですね。

梅原 その二十五菩薩の踊りは、よう出来すぎていると思って聞いてみたら はあ、先々代の千作さんが作ったんや!(笑)茂山家は民衆の中にとけ込んでいるから、意外なところで、狂言が入っているんです。

浄土教も源信から伝わる系統などいろいろあるので、おもしろい。



廣瀬 だから、現象そのものを調べる必要もあるし、その後ろにある思想や社会の流れとも関連づけなくては行けない。

長廣 先生はお考えになるだけでなく、さらに書くことによって実践もしてられる。

梅原 私は芝居を作っているからなあ。歌舞伎とか狂言というのは伝統で新しいものはないと思ったら、スーパー歌舞伎を作って、スーパー狂言も作って。

長廣 先生、今度は人形浄瑠璃もお書きになりませんか。

梅原 そうたくさんはできませんわ。

長廣 「地獄の思想」の中に人形浄瑠璃は出てこないのですか？

梅原 ある、ある、ある。でも、そう沢山はできない。

廣瀬 それはおもしろいかもしれせんね。スーパー人形浄瑠璃。

梅原 それは難しいですよ。やっぱり演出家が重要で、猿之助とか千之丞とか、あたるしいものを取り入れて伝統の中にしっかり組み込む演出家が必要です。猿之助と千之丞が偉いんです。

(ネルソンに向かって)それはもう、研究することがいっぱいあるわなあ。

ネルソン ええ、することがいっぱいあって。

梅原 やっぱり特に京都はいいですよ。

ネルソン はい、その通りです。

梅原 田舎にもよいところはいっぱいあるけれども、京都はやっぱり日本を作ってきた都の文化が残っているのだから。

廣瀬 ネルソンさんは19年東京にいらして、このほど京都に移ってこられた。

梅原 そりゃよかったわなあ。

廣瀬 先生、また話は変わりますが、ある新聞の対談で、京都に研究所が5つもできれば京都は立派な文化都市だとおっしゃっていましたか。

梅原 頑張ってるその音楽の研究所を元気にもっと大きくしなさい。拠点だけ作っただけでも大変なことだから。

廣瀬 京都らしいものができたと余所から

も言われます。たしかにこれまで京都になかったことがおかしいのだと言われるかたもいます。日文研も一つのモデルとして研究しました。

梅原 もうひとつ、やはり伝統芸能を研究するばかりではなくて、これから新しい音楽をやるには、伝統芸能を知らない日本人としていい芸術はできないと思う。さっきから言っているのだけれど、廃仏毀釈で伝統や教養というものをなくしてしまったことは非常に問題だと思う。何らかの意味で伝統音楽を知らない新しい芸術はできない。手段として尺八の音を使ってしまうというのではなくて、本質的に伝統を理解しなくては行けないなあ。作曲家はまだよいけれども、他の演奏家は何も知らないなあ。

京都芸大でも片岡義道先生がおられたけれど、声明の大家だよ。ところが、ドイツ語を教えていて声明は教えていなかった。

廣瀬 西洋音楽史なども教えておられました。

梅原 僕が思うに、片岡先生はドイツ語を教えるより声明を教えたほうがよほど良かった。一番よく知っていることを、何で教えられないか。これは日本の音楽教育のゆがみがあつたと思うな。ゲーテのファウストなんかも訳しておられる。独文学者としての評価はわからないけれど、声明の研究者としては高い。だからそういうことが、変わっていくといいですなあ。

廣瀬 今日の先生のお話をお聞きして、今後はなかなかおもしろいことが研究センターでできるような気がするのです。

梅原 それではこれでよろしいかなあ。まとまらない話でどうも。

長廣 思想を考え、芸術を考え、目の前が開けるようなお話をありがとうございました。

## 開所記念シンポジウム 「今、なぜ日本伝統音楽か」

### 実施報告

廣瀬 量平

本センターは平成13(2001)年3月10日(土)午後2時から標記のような開所記念シンポジウムを行なった。このシンポジウムは平成12年度の公開講座も兼ね、京都駅前にあるキャンパスプラザ京都[5階第1講義室]で一般公開で行なわれた(入場無料)。

このセンターの開所は2000年4月1日であったから、本来ならばこの開所記念シンポジウムはもっと早い時期に行なわれるべきであった。しかし、専任研究員の辞令発令が完了したのは5月1日であったこと、7月1日にはこのセンターの母胎である京都市立芸術大学の創立120周年記念式典とこのセンターを含む芸大新研究棟の完成記念式典などが挙行され、更にセンター研究機構や研究施設の整備などに追われ、当初の予定より遅れてしまった。

しかし、我々所員はこの開所記念行事の開催を必要と考えた。その理由はこのセンターの設立の意義を認識し、その在り方を探究し、その存在理由をみづから問うと共に、外からの批判を受け止めつつ、出来得ればその期待にも答えることにより、新しい時代にふさわしい研究施設として使命を果たしていきたいと願ったからである。そしてその方向づけになるようなシンポジウムを是非行ないたいとの思いがあった。準備のために何度もミーティングがもたれ、その結果、絞り込まれた方針に基づき計画が立てられ、実行に至った。

このシンポジウムの告知のためのパンフレットが作られたが、それには次のように書かれている(廣瀬が執筆)。

西洋クラシック音楽やポピュラー音楽をはじめ、あらゆる音楽が充満している今日、なぜ、日本伝統音楽なのか？

そもそも、何をもって日本伝統音楽とするか？

他の多くのジャンルの音楽の魅力に比べ、日本伝統音楽の魅力は何か？

そして、その存在意義とは？

さらに、それが継承・保存・研究されることの意味と課題。

日本文化、ひいてはその他の文化とのかかわりや比較。

教育との接点。

国際的視野から見た日本伝統音楽。

日本伝統音楽の未来。

以上、多くの問題を様々な角度から論ずることにより、新しい視点を発見できればと願って、このようなシンポジウムを計画しました。

小島美子さんは、かねてから、日本音楽の在り方について、貴重な提言をなされてこられ、わらべうたや民謡についても豊富な経験をお持ちです。

前田昭雄さんは、スイスを拠点にして活躍されている音楽学者であり、国際的な広い視野に立つ諸研究は、つとに知られています。

井上章一さんは、常に鋭い批評精神と柔軟な思慮を持ち、ユニークな発言で知られています。また、「美人論」でも有名で、自らジャズピアノもたしなまれるとか。

これら、ユニークな方々が、日本伝統音楽を俎上にしたとき、どのような議論が展開されるか、御期待ください。

廣瀬量平 (ひろせりょうへい) 作曲家・日本伝統音楽研究センター所長

作品：「尺八とオーケストラのための協

奏曲」(尾高賞受賞)「みだれによる変容」  
「夢幻砧」他

小島美子 (こじまとみこ) 国立歴史民俗博物館  
名誉教授・日本音楽史研究者

著書:「日本の音楽を考える」「音楽から  
みた日本人」「日本音楽の古層」他

前田昭雄 (まえだあきお) ハイデルベルク大学  
教授

専門分野: 音楽学

著書:「シューマン交響曲への道」(独文)  
他

論文:「東と西における音楽史の概念」  
(英文)「音楽史学としての日本音楽研  
究」他

井上章一 (いのうえしやういち) 国際日本文化  
研究センター助教授

専門分野: 建築史・意匠論

著書:「南蛮幻想」(芸術選奨文部大臣賞  
受賞)「The 霊柩車」「つくられた桂離宮  
神話」他

\* \* \* \* \*

パンフレットの表側記載は次の通りである。

\* \* \* \* \*

挨拶 西島安則 京都市立芸術大学学長  
設立の経緯と問題提起 廣瀬量平 日本伝  
統音楽研究センター所長

記念演奏「尺八独奏のための鶴林(かくりん)」  
(廣瀬量平作曲) 山本邦山 都山流尺八  
奏者 東京芸術大学邦楽科教授

パネルディスカッション

コーディネーター・司会 廣瀬量平

パネリスト 小島美子

前田昭雄

井上章一

進行 久保田敏子 日本伝統音楽研究セン  
ター教授

会は久保田敏子教授の進行で行なわれ、  
まず西島安則京都市立芸術大学学長の挨拶  
で始った。学長は日本伝統音楽研究施設が  
必要であるとバックアップした京都市民と、  
思い切った決断をした京都市に感謝し、つ

いで当日このシンポジウムに出席された上  
山春平前学長に対し、このセンター設立の  
最後の準備をされたことへの謝辞を述べら  
れた。

次に所長の廣瀬量平が、センター設立の  
趣旨と平成3年から今日までの9年間に及ぶ  
設立の経緯を報告し、次いで当日のコー  
ディネーターとして、シンポジウムに対す  
る問題提起を行った。

その要旨は 明治初年の開国期からはじ  
まる官主導による近代化政策、欧米文化の  
摂取と工業化と産業発展、富国強兵政策と  
教育・文化の問題、脱亜入欧の傾向とその問  
題点と、それからの脱却について。日本文  
化の独自性の再認識と、就中世界の音楽の  
中で日本伝統音楽の存続する意義が、日本  
語及び、そこから常に発生する日本文学の  
貴重さにたとえて言及した。更にこの百  
年余の日本における音楽一般教育の再検討  
の必要、その他、伝統の継承の在り方、即  
ち単なる保存にとどまらず、創造的な発展  
の在り方、更には、それを今日の世界音楽と  
して人類に貢献する可能性などにも触れた。

そしてこのセンターがそれら様々な問題  
に答えるために、どうあるべきか、即ち研究  
方法や研究所の在り方など、新しい時代の  
ための使命を果たすためには、どうあるべ  
きかの提言をパネリストに求めた。

それを受けて小島美子氏は 日本伝統音  
楽の定義として、先づ「ある程度の歴史と伝  
統をもって日本人によって演じられたり、  
楽しまれたり、あるいは支えられてきたと  
ころの音楽」と規定された。そして、「明治  
以来に伝えられた西洋のクラシック音楽や  
様々なポピュラー音楽や、インドネシアの  
ガムラン音楽などは、まだ歴史性という点  
では足りないが故に、私は日本伝統音楽か  
らは除外する」との見解を述べられ、その上  
で 「音楽を全階層的にとらえるべきであ  
る」との主張を提示され、箏・三味線・尺八  
だけでなく、民謡・わらべ歌・民俗芸能の音  
楽、民俗宗教の音楽、仏教や神道の音楽など  
芸術性を追求した音楽に限らず、一般庶民  
に受け入れられて来た音楽すべてを伝統音

楽とする。そして、こうした伝統音楽は、日本列島の風土の中で、日本人が培ってきた音楽で、日本人にとってもっとも自然な音楽であるから必要であると考え。自分は日本音楽は優れていないとか魅力がないとは思っていないが、日本の音楽文化はここから発展させるべきものだと考えている。そしてもし仮に、それが優れていない、魅力がないということを確認したとしても、私たちにってはやはりこれしか基礎にするものはない。これは私たちにって無意識にもっている音楽感覚なのである。

だからこそ日本伝統音楽をきちんと学ぶ必要がある。それ故にこの立派なセンターの存在は非常に重要である。これは単に京都の伝統音楽センターである以上に、日本の研究センターになってほしい。それと同時に日本の伝統音楽も今日の音楽として発展していかなくてはならない。私自身は今後の日本の音楽の発展の方向を知りたいが故に、日本伝統音楽を研究している。今日のような激動期にはやはり日本伝統音楽のどの部分の研究をしていくか、日本音楽全体としてどういう事が必要かを大きな視野でとらえた上で自分の専門分野を考えていくことが必要であると結ばれた。

前田昭雄氏は前日スイスから帰国されたばかりであったが、先づ御自分の生い立ち、日本人であることとヨーロッパ文化との関わりをbiographicalに語られた。ドイツのハイデルベルグ大学で西洋音楽を講じられているにも関わらず、スイスのチューリッヒ大学では日本語や日本学、日本音楽を教えられるため、日本伝統音楽についても、決してアウトサイダーでなく、さりとて全くのインサイダーでもないという微妙な立場であると語られた後、ヨーロッパで日本文化や音楽について話される時にたまたま遭遇する様々な反応について興味深くしかも生き生きと話され、それらの体験から

世界文化の文脈のなかでみると、日本伝統音楽文化というもの、日本人が日本という場で魅力があるか、なければ止めようと

か、魅力があればやろうかなどと、日本人だけで決められる問題ではない。もはや世界文明史・文化史の中で日本文化を欠落させることが出来ない。そしてそれを大切にすることは日本人の国際的義務である。しかし、日本人が日本の伝統音楽との自然な関係を将来も持ちつづけていけるかということは教育の問題にもかかわる。

続いて井上章一氏は、まず中世の幸若舞の伝承ビデオを観られた経験から話された。戦国武将の織田信長も愛好したというあの幸若舞が、あのように退屈なものであったのか、そうであるはずはない。とするとこれはひとえに 伝承の仕方の問題があるのではないかと発言から始められた。次いで御自分の建築学の師上田篤氏が突然三味線に凝り、そのおつき合いで 長唄をきくと、驚くほど色っぽい。そういう色街の文化の色っぽさを抜きにしては、日本伝統音楽は考えられないのではないかと。だからもし大学の研究センターで、そういう音楽をただひたすらアカデミックに研究すると音楽の実態と本質を掴みそこねてしまわないか。

そういう良さ、つまりエロスの部分も含めて日本伝統芸能の良さをも研究する研究センターであってほしいとの問題提起をされた。

このあと各パネリストから、「子供のうた」や、再度「色っぽさ」についての発言がなされ、前田氏からドイツ語には「色っぽさ」に相当する言葉が見あたらない、との発言もあり、会場は笑声に包まれたが、これは音楽を死に体で研究するのではなく、あくまで生命あるものとして研究してほしいとの指摘が比喻を通して表現されたのだと思う。

次いで井上氏の最近の著書「南蛮幻想」から日本人の海外願望、海外幻想は、昔から日本人にある憧れであるとの発言があり、これも日本文化の一つの特徴であり、日本人の音楽関心の在り方においても無視出来ない視点である。

また、前田氏は「西洋クラシック音楽は

ヨーロッパが世界に送ったプレゼントである」との言及もなされた。それに加えて「日本人は伝統的に文化的マルチ思考が出来る民族である。日本人ばかりでなく、マルチ思考の必要性を強調したい」との発言も重要な提言であった。単眼ではなく複眼の思考が今日世界的規模で必要とされていると思われる。

また、廣瀬から古い伝統と見せかけて商業的にコラージュされた疑似伝統の問題も提起され、更に前田氏から「伝統」という言葉そのものについての検討の必要性が述べられた。

また、センター所員でオーストラリア人のスティーヴン・ネルソン助教授は自己紹介を含む日本での体験を語ったが、その中で地歌箏曲の歌詞に二重の意味があることを発見した当時の驚きを述べた。それはつまり表面の意味と、裏に隠されたタブーとしてのエロスの問題でもある。

この日の論議は、日本伝統音楽研究の在り方についての正面からの論点を第一テーマとすれば、その陰に音楽を人間の間で生きた物としてとらえることの難しさを「色気」という言葉に置き換えた第二テーマが織り合わされて発展し、コーディネーターの予期しなかった盛り上がりを招き、討議を魅力的に進行させることになった。

#### その一例

井上「色気を含めて日本音楽だと思います。

このセンターでも研究費をとって芸者遊びをなさることをお勧めいたします（場内笑）。京都市がそんなことに研究費出さかわかりませんが、予算請求の作文をうまく書いて、研究費が出たら是非私も誘って下さい（場内笑）。」

廣瀬「エロティシズムというものも音楽の大事な要素なんですね」

井上「ええ、これを全く落してしまう研究には欺瞞があると思います（場内笑）。もちろんそれだけと言うわけではありませんよ。」等々。

このあと音楽教育についての文部科学省の新しい方針、2002年度からの和楽器必修のことや教育の問題が織り上げられ、小島美子氏は「伝統復帰には警戒すべき傾向もないわけではない」「日本は神の国だ」として伝統文化を利用する人々もいるとの発言もあった。私たちはそれぞれの民族の文化それぞれの地域の文化をみんな大切だと思っているのです。自分の国の文化も、中国やインドや韓国やヨーロッパの文化もみんな大切に思っている。これまで教育については役所が決めて「その通りにやらねばならない」という指導の形だったのが、今度はそういう形ではなく、伝統音楽についていろいろな接し方をしていいのだから、新鮮な気持ちで指導する先生方もおおいに自信をもって、それぞれの得意な所から始めればよい。

参加者約100人、パネリスト一人一人がユニークな発言をされ、時折爆笑も湧き起りつつ大切なテーマが観念的なものになることなく、柔軟で知的なセッションとなったことはうれしいことである。ひとえにパネリスト、そしてよい参加者のおかげと感謝している。

この要約は発言者の真意を損なっているかもしれないと恐れつつ廣瀬がまとめた。

このシンポジウムの記録はインターネットと当センターの紀要に掲載される予定である。

なお、会場の関係で質疑応答の時間が少なく残念であったが、研究者ばかりでなく一般の人々を多く交えての会として成功を危ぶんだものの「オモシロカッタ」との声が主催者側の身軀を差し引いても少なくなかったように見えた。しかもセンターの将来にとって大切な提言もいただき、所員及び関係者一同感謝している。

## 現代邦楽番組誕生のころ

長廣 比登志

伝統楽器による創作活動への道を、おおきくきりひらいた契機の一つが、NHKのラジオ番組にあったということは、関係者のあいだでも、存外知られていない。古典の保存と新作研究という大命題をかかげ、実は戦前から、演奏家、作曲家、研究者による研究会をNHK内部につくっていた。新作研究の過程で発表された作品に、現代箏曲の名曲、中能島欣一作曲 六つの断章(1942)があった。戦後における創作活動の様子を、当時の放送番組から、三つのポイントに絞って概観してみよう。

### 1. 邦楽器の新作紹介番組誕生

1947年4月20日(日)9時45分から10時まで、NHKラジオ第1放送で『現代邦楽の時間』が放送された。NHKの放送史上で、「現代邦楽」の名前がつかわれた最初である。創作作品を紹介する定時番組として、また、邦楽の新種目としての位置付けをも意図した番組といえる。戦前、『新日本音楽』という番組枠があったが、その延長線上にありながら、「新日本」ではない「現代」日本を透視する願いも、あるいはあったのかも知れない。

この日放送されたのは衛藤公雄作品で、箏独奏曲 春の姿(1944年)、箏三重奏 薫る花(1945)、箏五重奏 湧き出づる力(1944)、以上3曲で、衛藤公雄、大塩寿美子、衛藤満寿子ほかの方々出演であった。放送の新年度も、会計年度とおなじく4月からなので(正確には4月第1週月曜日から)上記番組は47年度の新設番組となった。このままずっとつづいていたなら、「現代邦楽」の開発推進に多少の影響があったかもしれないが、この言葉が定着して市民権を獲得するまで、数十年間の熟成期間が必要であった。

その数十年後の64年4月から、『現代の日本音楽』という番組が誕生し、現代邦楽の専門番組となった。前号でもすこしふれたが、わたしがこの番組担当となってしばらくして、番組の記録を整理しながら、現代邦楽の内容や、起源などについて気になりだしてきた。そこから放送の公式記録であり、放送文化史のUrtextである「番組確定表」の中の、現代邦楽探しがはじまった。1年1年、紙質がどんどんわるくなっていくのを指先で感じとりながら、ついに47年4月に源泉を見つけた時の感動を忘れることはできない。

なお、現代邦楽の名称の放送以外での初出は、50年2月発行の冊子『現代邦楽』とされる。発行者は、現代邦楽の作曲家で尺八・みさと笛奏者の山川直春である。

ところで47年の『現代邦楽の時間』は、その年の10月19日、都合29回の放送で打ち切られる。続いて11月4日から年内一杯、『現代邦楽』となる。47年度に放送された作品数は延べ300曲を越す。48年には、なぜか『新日本音楽』というなつかしい名前が復活する。町田嘉章(佳章)、久本玄智、吉田晴風など新日本音楽時代の作曲家たちの作品ばかりだった。年が明けて49年1月から、『今日の邦楽』が新設され、3月初旬には『こんにちの邦楽』と改名し、そのまま49年度に引き継がれていく。結局48年度は延べ230曲余りが放送された。この番組名も長続きせず、9月第1週で廃止となる。49年度は延べ150曲余りが放送された。その後は前述のとおり、56年8月の『現代の邦楽作品』まで7年間、タイトルから現代邦楽番組らしい名前が消え去る。

番組の名前というのは、現在では1年や2年で消えることは、まずない。番組が定着する年月と周知度をかんがえると、3年は最小期間だとおもう。不慣れなアメリカ式番組編成方式による当局の指導で、常にあわたしい状況にあった当時のNHKでは、長い

スパンでの番組の定時化は、望むべくもなかったといえる。

## 2. そのほかの新作紹介の場

現代邦楽紹介の指定席であったこれらの番組が廃止されたからといって、新作がまったく放送されなくなったのではない。たとえば古典邦楽の番組以外にも、『療養の時間』『婦人の時間』『農家へ送る夕』『経営の時間』などの中で放送された作品も相当の数のにのぼる。総括すると3年間に、延べ700曲にのぼる作品、160名の作曲家が登場した。この数は半端ではない。64年度から8年間の『現代の日本音楽』が、延べ1000曲ほどの作品数であったこととくらべても、驚異の数字である。戦争中の停滞からの解放が、創作意欲をかきたたせたにちがいない。

番組名の、いささか場当たりの改変は、視聴者、出演者にとって迷惑混乱のもとといわれるだろうが、内容の刷新・改訂をもとめられる時には、きまってタイトルをいじられることとなる。

## 3. 3年間に登場した作曲家

この3年間(1947年～1949年)に登場した作曲家を、その出身母体でわけてみると、箏曲系と長唄系が二分するような格好になっている。放送された回数が多い順に列記すると、箏曲系として、伊藤松起、衛藤公雄、斎藤松声、中塩幸裕、中村双葉、久本玄智、宮城道雄、宮下秀冽、山川園圀、米川敏子、ほか24名。長唄系として、今藤長十郎、4世杵屋佐吉、杵屋佐之助、杵屋正邦、ほか24名(囃子系含む)。これ以外は、尺八系の吉田晴風ほか7名、琵琶系の初世橘旭翁ほか4名。さらに洋楽系の清水脩、下總皖一、平井保喜(康三郎)らもみえる。下總のソナタ形式による箏独奏曲(作品目録では箏独奏のためのソナタ)は、1938年に作曲されたもので、洋楽系作曲家による箏作品の第1号とされる。

上記以外には、東明流の平岡吟舟ら。意想曲の田中允山ら。芙蓉曲と三絃主奏楽の4世杵屋佐吉などがいて、一般受けをねらった三味線小曲である。これらの音楽が人気をよんだ、大正から昭和にかけての近代日本文化史的考察がまたれる。

## 4. 今後の課題

わたしが気にしている数字がある。この3年間で延べ700曲ほどの作品が放送されたのだが、その中の60パーセントほどが、純器楽曲である。つまり430曲程度になる。のちの『現代の日本音楽』の記録では、ほぼ84パーセントである。この数字のもつ意味は、きわめて重要である。現代邦楽は、器楽ばかりという傾向が、時代が下るにつれて、漸増しているからである。

もう一つ。数字ではないが、47年度になって今藤長十郎や4世杵屋佐吉ら、長唄系の作品が激増することである。この2点は相関関係があるかもしれないが、後者については、一つは45年暮れの佐吉の死や、演奏家側の態勢が原因にあげられるかもしれない。

前者については、現代邦楽における声の扱い方、声楽作品のあり方にかかわるおおきな問題で、極論を許されるならば、器楽作品ほどの成果をまだ上げていない。邦楽系の作曲家までもが、声を捨てた。または声から逃げた。現代邦楽の歴史は、伝統音楽が積み上げてきた声の芸術からの、意識的離脱の歴史であった。それはこんにちもなお、つづいている。

(この小論では、正確な数字の表記を避けた。現在、45年から64年3月までの放送記録を作成途次であり、まだかなりの精査を要する。大づかみな話として読んでいただければ幸いである。)

## 私の2001年夏プロジェクト

- IAML Périgueux大会に参加して -

高橋 美都

困難な課題を克服した人々のノンフィクション『プロジェクトX』という番組が共感を集めているらしい。日本伝統音楽研究センターにも、2001年度からプロジェクト研究という枠が認められた。2001年6月末日現在では、研究会の開催方法は模索中であり、ようやく2つのプロジェクトをゆるやかに統合実施する方向がみえつつあった。

これは、七夕の朝から祇園祭の宵宵山までの(研究センターのプロジェクトと関わる)個人の短い海外研修報告である。この発端は5月12日に遡る。「音楽図像学の可能性」と題された音楽学会と東洋音楽学会の合同例会があり、国際音楽資料情報協会 = IAML (International Association of Music Libraries, Archives and Documentation Centres) の日本支部事務局長の秋岡陽氏が司会をされた。発表者は放送大学の笠原潔氏とRILM (Répertoire international de littérature musicale) 日本支部事務局長の関根敏子氏であった。パネルディスカッションの中で、ネルソン氏が着任以前から数年にわたって構想を暖めていた「図像学プロジェクト! 京都の伝統音楽研究センターにおいて発進近し!」を公言し、趣旨説明の上で参加者を募った記念すべき日であった。秋岡氏は「欧米から日本に、情報提供と相互協力を求める暖かいまざしが注がれている」と7月13日から18日にフランス(の名も知らない町 = Périgueux)で開かれる、協会50周年大会への参加申し込みが可能という示唆をされた。この機会に情報収集と伝統音楽研究センターからの情報発信予告?ができないかと二次会で発作的に思い立った私は、5月中に大学からの海外研修許可をいただき、5月末のIAML日本支部の総会後には、世界大会に参加する事前レクチャーを桐朋学園大学図

書館の藤堂雍子氏から受けていた。

音楽図書館・資料館・放送局・オーケストラなどにライブラリアンとして勤務する人々の組織で、現在は22カ国にある各国支部が協力運営しているIAMLである。機関からの派遣が理想であるが、にわかのことであり、伝統音楽研究センターという機関に所属する個人が私的に参加する形をとった。したがって旅費は自分で工面し、エントリーや交通宿泊も独力で手配するしかなかったが、幸運に恵まれたと思う。大会本部に提示されたのは夏期休暇中の専門学校寮を利用するプランで、一泊60フラン(約900円)で朝食付きであり、7泊分には手数料や送金費用を含めても、日本のビジネスホテル1泊分で済んでしまった。6月30日に雅亮会(雅楽演奏団体)セミナー講師として支給いただいた「研究費」に助けられたことにも感謝したい。

出発の日の朝までプロジェクトが2件合同開催になった事務処理に追われたので、道中は熟睡でき、時差ぼけとは無縁だった。会議のスケジュールは全体のセッションもあれば分科会や部会や委員会などが常に3箇所ほどで平行してびっしり行われていた。参加や聴講する内容は自分で決められ、発言も比較的自由であった。午前と午後30分づつ設けられたティータイムは、情報交換する人々の輪があちこちにできた。新参加者が心細げに立っていたら、「博物館にいったらたぶん日本の楽器があったぞ」「明日、自分が議長をするデータベース試案のミーティングをするけれど来ないか」などの親切な声がかかった。

会議参加目的に、当センターのプロジェクトに資する何かを得たいという思いがあったことはたしかである。また、データベース作りということにかねてから関心を持っているので、その情報収集も希望していた。その目的達成度はいかほどであったか、採点は難しい。はじめての参加者に向けての懇



切なガイダンスがあり、自分の仕事の中身や参加の目的、今後の抱負などを、拙いながらも表現しようとして言葉に詰まると周囲が助けてくれるような環境であった。音楽画像学に関しては、目にみえる果実を受け止めるに至らなかった気がするが、さまざまな先行研究があり、データベースなどの決定版は皆で模索中という状況がよく見渡せた。一方、web上で情報を整理統合していく方向性や潮流はすでに大河の域に達していると感じられた。

日常生活では、大会の名札をつけて歩いていけば、スタッフも町の人々もとても親切だった。寮は会場まで歩いて15分ほどの場所で、シンプルな3人部屋を1人使用させてもらえた。フロアもシャワーとトイレも男女の別がないことには少し驚いたが、朝食時には挨拶をかわすような住みやすい環境であった。電気や水道の節約は徹底していて、シャワーはボタンを押している間だけ湯がでる。一度に大量に使う人がいて、沸かす能力が追いつかなければ、そこから水になる。日暮れ後の出入りには懐中電灯必携であったが、なかなかできない貴重な体験であった。電話をかけるなら、市内でも国際電話でも同じICチップのついたカードが必要なのだが、自動販売機などはなく、たばこ屋か郵便局の窓口に行き入手する。寮に公衆電話があったが、カードを使って日本に電話する方法を会得するのはパズルのようであった。また、会場に設置された公用のパソコンを使って、京都芸大の学内ページにアクセスすれば、ローマ字ならwebでメール送受ができたが、フランス式のキーボードでは「A」の位置が「Q」になるのに面食らった。

夜には連日、セレモニーや音楽会が用意されていたが、そこで演奏される音楽はハーディーガーディーのオーケストラや超現代曲などの異色の取りあわせが多く、場所も会場のシアターのほかに中世の遺跡が

点在する町のあちこちの教会などが使われて、変化に富んでいた。フェアウェルパーティーは山の中の洞窟のようなレストランの大ホールを使い、パートナーなども含めて300人ほどが集った。夕刻から深夜におよぶ長い長い食事で、席をかえて庭にでたり、本当によくおしゃべりしていた。

思い出多い5日間はビギナーに微笑んだ幸運とともにあっという間に過ぎ去った。閉会の翌朝は、鉄道駅まで徒歩で1キロほど荷物を転がしながら歩き、ローカル列車を乗りついでボルドーまで、そこから国内線の飛行機でパリまで、さらに国際線に乗り換えてと全く寄り道はしなくても、待ち時間を含めて、自宅まで36時間の旅になった。すぐに平常の仕事に戻り、プロジェクト研究の第1回研究会になだれこんだ感覚である。

\* \* \* \* \*

## 香港2001 PNC年次大会に参加して

- 唐楽研究の今後 -

スティーヴン・G・ネルソン

2001年の前半、私は2つの大きな国際会議に参加して、研究発表を行なった。

2つ目の会議から話を始めたい。3月22～25日、アメリカのシカゴで開かれたAAS (Association for Asian Studies, アジア学学会)の年次大会は、参加者千人以上、研究発表700件以上という、たいへん大規模なものであった。同じ時間帯に開かれたセッションの数の多さ、研究テーマの幅広さには驚いた。私が発表者として参加したセッションには、中世初期の講式の読誦法や平家語りに関する私の発表の他に、唱導や唱導文学、幸若、及び平家物語の琵琶関係の逸話に関する発表があって、日本の中世におけるさ

さまざまな「音」や「声」と「文字テキスト」との関わり方、伝承の諸相などが議論の焦点になった。オーストラリア人の私を除くと、他の発表者は若いアメリカ人で、いわゆる「音楽学」や「民族音楽学」ではなく、日本文学を専門とする研究者たちであった。

こうした文学の専門家が音楽や芸能を研究対象とするようになりつつあることは、たいへん喜ばしい傾向であるとともに、音楽畑の人間がうかうかしていられないことをも意味する。別の見方をすれば、日本の伝統音楽に関する歴史的研究をしようと思う外国人研究者が、古文や漢文など、地道な努力を要する言語上のスキルを修得することはどうしても必要であり、そのスキルそのものが評価される日本文学という分野の場合とはともかく、そうした努力が、業績の面においても就職の面においても時間のロスとしか見なされない最近の欧米の(民族)音楽学では、伝統音楽の歴史的研究がますます期待できなくなってきているのではないかと思えるのである。

シカゴの会議のほぼ2カ月前、私は香港の九龍地区にある香港城市大学で開かれた2001 PNCの年次大会(1月15～20日)に招聘され、研究発表を行なう機会に恵まれた。PNCとはPacific Neighborhood Consortium(パシフィックネイバーフットコンソーシアム、太平洋近隣協会)の頭文字をとった略称であるが、この協会はパシフィック・リム(環太平洋地域)諸国の高等教育機関における情報交換の可能性を最大限に広げるべく、コンピュータ及び情報技術の開発と推進のために1993年に設立された機関である。1997年にその本部は台湾の中央研究院(Academia Sinica)に移され、現在に至っている。

コンピュータの高度な利用法にかなり疎い私が、こうした協会の年次大会に招聘されること自体、不思議に思われても仕方がないが、実は私が国際基督教大学で非常勤

講師をしていた頃の教え子、香港出身の呉国偉(Ng Kwok-wai, Kolly Ng)さんが、香港城市大学の中国文化中心(Chinese Civilisation Centre)に所属しており、彼が、今回の大会が香港城市大学で開催されることを知り、日本の雅楽、特に唐楽を研究対象としている研究者のために、いくつかのセッションを設定してもらった交渉に成功したのである。その結果発表者としてよばれたのが、オーストラリアから1人、アメリカから2人、そして私を含めて日本から3人であった。海外で開かれた学会に、これだけの唐楽研究者を集めること自体、かなりの快挙だったと思うが、実はこの集まりはこれからの唐楽研究にとって画期的とさえいえるものであると感じた。

日本では一般的にそれほど意識されてはいないが、唐楽の研究は海外でも活発に行なわれてきた。イギリス、ケンブリッジ大学のローレンス・ピッケン博士(Dr. Laurence E. R. PICKEN)は、1950-60年代には単独で、そして1970年代からは若い弟子たちを集めて研究グループを組み、唐楽の古楽譜に関する研究を進めた。その研究活動については、すでに紹介した〔ネルソン1988〕の details は省くが、一言でいうと、各々に様々な問題を孕む膨大な数の研究成果が発表されてきたということである。ピッケン氏の研究の着眼点には素晴らしいものがあり、評価すべき点もいろいろあるが、日本語による研究論文が読めるほどの言語力はなく、また弟子たちをいわば研究の「道具」のように使ったり、日本へ留学もさせないで理解が不十分なまま博士論文をまとめさせたりして、また本人自身の性癖も大きくかわり、残念ながら今ではケンブリッジ研究グループ全体の成果に対して、日本での評価はあまり芳しくないといわざるを得ない。厳しい見方をすれば、グループそのものが80年代に事実上崩壊したのも仕方のないことであったのかもしれない。

ちなみに、外国人の雅楽研究者でもある私は、このグループとは無縁というわけではない。センター所報の第1号でも書いたように、シドニー大学在学中、私はアラン・マレット博士 (Dr. Allan MARETT) の指導を受けたが、マレット氏はピッケン氏の研究グループの1人で、ケンブリッジ大学で博士号を取得してから日本留学を経験し、かなりの若さでシドニー大学に赴任していた。マレット氏の強い後押しもあって私はケンブリッジ大学などに行かずに日本を留学先に選んだのであるが、これがピッケン氏にとって面白くなかったらしい。そして私がケンブリッジ研究グループのメンバーの著作に対してかなり批判的な書評を訳したり書いたりした1985年以降、会ってもいないのにならば「絶縁」状態にされた。その後、私の雅楽関係の業績はピッケン氏の作成してきた雅楽研究文献目録でほとんど取り上げられることはなかった。いってみれば、孫弟子の私が勘当された状態になっている。そのことをずっと残念に思ってきたことはいうまでもないが、頑固な老人学者に受け入れてもらう術はつい見つからないでいる。

そうとう脱線してしまったようなので、ここで昨年の香港会議に話題を戻す。さきほど今回の会議は画期的であったと書いたが、その理由はまず集まった人たちの顔ぶれにあった。つまり、オーストラリアから参加の1人はマレット氏、アメリカからみえたのはケンブリッジ大学雅楽研究グループの中心メンバーの2人、レンブラント・ヴォルパート博士 (Dr. Rembrandt WOLPERT) とエリザベス・マーカム博士 (Dr. Elizabeth MARKHAM) であった。この2人は夫妻で、今ではともに米国のアーカンソー大学のフルブライト人文科学学部の教授であり、同学部の付置研究所、古代アジア音楽国際研究センター (International Center for Research in Ancient Asian Musics) で研究を行ったり教鞭を執っている。同時に、2人は米国会国会

書館 (Library of Congress) が進めようとしている「古代アジア音楽保存プロジェクト」 (Ancient Asian Music Preservation Project) の学術研究担当者であり、今後米国における古代アジア音楽研究を押し進める責任のある立場にある。ヴォルパート氏は特にコンピュータの高度利用の専門知識を豊富に持ち、コンピュータを用いた研究が同研究センターの1つの大きな特徴になりそうである。

日本から香港の会議に参加したのは私の他に、神戸大学の寺内直子氏と東京学芸大学の遠藤徹氏であった。若手の雅楽研究者として、日本を代表するのにふさわしい2人である。香港の呉国偉氏も発表者とした参加したので、結果的には合計7人の発表者で、ケンブリッジ大学雅楽研究グループ、日本の雅楽研究者、および香港の雅楽研究者が集まったわけである。ケンブリッジ大学のピッケン氏が半世紀前に始めたことが、21世紀の幕開けという年に、このような形を迎えるとは誰が予想できたであろうか。当のピッケン氏は高齢で国際会議への参加は無理であったが、これは逆に幸いしたのではないと思われる。「頑固な老人学者」の悪影響なしに、彼の評価すべきいい所を取り入れていこうというスタンスのもとで、さまざまな違った方面から唐楽の研究を行ってきた人たちが、これからの唐楽研究の可能性について建設的な形でいろいろと討論できたからである。

結局、唐楽関係のセッションが3つ開かれた。やや専門的になるが、それぞれの内容について簡単に紹介して、今回のエッセイの終わりとしてたい。

セッション：IT and Music in Asia (アジアにおける情報工学と音楽)

司会：ヴォルパート氏

A new direction for the “Tang Music Project”: Coding ‘medieval’ Japanese musical manuscripts (「唐楽プロジェクト

ト」の新しい方向 - 日本の中世楽譜のコード化 - ) ヴォルバート氏

Producing performance scores for the “Tang Music Project” from coded Japanese musical manuscripts—versions and variants—(コード化された日本の楽譜から「唐楽プロジェクト」演奏用の総譜を作り出すこと - 諸説とヴァリエーション - ) マーカム氏

互いに補い合う形で、「古代アジア音楽保存プロジェクト」の重要な一部をなす「唐楽プロジェクト」の内容を具体的に示す発表となった。ヴォルバート氏の発表では、唐楽の古楽譜の内容をコード化してコンピュータ言語に置き換え、さらにそのコード化されたデータから元の楽譜を再生したり(チェック機能)、印刷やウェブといった媒体に載せたり、自動五線譜化や電子楽器制御のためのMIDI化のプロセスなどを示し、研究データの多面的な分析の手続きを可能にする操作方法が取り上げられた。マーカム氏の発表ではその具体例として、実際に演奏可能な総譜を準備する中で、コード化されたデータによるコンピュータ生成が、元の楽譜にある諸説やヴァリエーションを取り込むことを可能にし、また多くの諸説やヴァリエーションの共通要素を確定するにも役立つことが指摘された。ともに専門的で難しい内容であったが、「唐楽プロジェクト」が動き出そうとしている方向性が垣間見られた。

セッション：Modes in Tang Music and Japanese *Tôgaku* (唐の音楽と日本の唐楽における調)

司会：沈冬氏 (SHEN Tung、国立台湾大学)

A reconsideration of modal practice in the tenth century Japanese flute source *Hakuga no fue-fu* in the light of recent research (10世紀の笛譜『博雅笛譜』における調のあり方を再考する - 最近の研究を考慮して - ) マレット氏

The interpretation of Chinese modal theory in *Jinchi Yôroku* and *Sango Yôroku*—An examination of the usage of *gong* in late 12th-century Japan (『仁智要録』と『三五要録』における中国の調理論の解釈 - 12世紀末の日本における「宮」の使い方に関する一考察 - ) 呉氏

Bimodality in the Japanese *tôgaku* mode *ichikotsu-chô* (日本唐楽の壹越調における重調性 壹越調に混在する二つの調) 遠藤氏

このセッションでは、唐楽の調理論が、日本への伝来当初から平安時代の末までにどのように変化していったかという統一テーマがあり、多様な学問背景の発表者がいたにもかかわらず非常にまとまりのあるセッションとなった。マレット氏と呉氏の発表が、それぞれ10世紀と12世紀末の楽譜史料に焦点を当てた、いわば「点的」な内容であったとすれば、遠藤氏の発表はさまざまな点を結び付ける「線的」な内容で、他の参加者にとってたいへん興味深いものであったようである。

セッション：Interpretation of Tang Musical Sources in Japan (日本における唐楽譜の解釈)

司会：陳応時氏 (CHEN Yingshi、上海音楽学院)

Issues in the interpretation of notation for East Asian lutes (*pipa* / *biwa*) as preserved in scores of the eighth to twelfth centuries (8世紀から12世紀にかけて成立した琵琶の古楽譜の解読における諸問題) ネルソン

A tentative reconstruction of *tôgaku* of the late 12th century: Focusing on the temporal aspect (12世紀末の唐楽の復元試案 - 時間的側面に焦点を当てて - ) 寺内氏

コメンテーター：ローレンス・ウィツレーベン氏 (J. Lawrence WITZLEBEN、香港中文大学)

このセッションでも平安時代末までの唐楽



後列左から：呉氏、筆者、ヴォルパート＝マーカム夫妻の愛嬢フレデリケさん、陳氏、ヴィツレーベン氏。中央列左から：沈氏、マーカム氏、寺内氏。前列左から：マレット氏、1人おいて、ヴォルパート氏。遠藤氏はすでに帰国の途についていた。2001年1月18日、香港城市大学にて。

が取り上げられたが、焦点は楽譜の解釈であった。私は、これまでの琵琶の古楽譜の解読をめぐる諸問題を中心に述べたが、特にリズムと奏法に関する解釈がばらついており、言語・学派の障壁を乗り越えた、研究者間の直接対話への努力がもっと必要であると強調した。寺内氏は、これまであまり問題にされてこなかった平安時代末のリズム体系の有り様を、2つの違った観点から論じたが、寺内氏の研究以外では研究の積み重ねが浅いためか、私には議論の余地がまだ多いように感じられた。建設的な批判、意見交換が必要であると感じた。

なお、遠藤氏と私の発表を除いて、以上の研究発表の内容は台湾の中央研究院計算中心 (Computing Centre, Academia Sinica) によって出版されたCD-ROMに、英文だけではあるが、とりあえず収められている (*Proceedings of 2001 PNC Annual Conference & Joint Meetings, January 15-20, 2001*)。直接下記のPNC事務所へ問い合わせれば、CD-

ROMを手に入れることができるはずである。遠藤氏と私の論考については、今年発行予定の当研究センター研究紀要『日本伝統音楽研究』第1号を参照されたい。

Pacific Neighborhood Consortium,  
P.O. Box 1-8, Nankang, Taipei, Taiwan, R.O.C.  
<http://PNCLink.org>  
e-mail: [pnc@pnclink.org](mailto:pnc@pnclink.org)

#### 参考文献

ネルソン, スティーヴン・G. 1988 「雅楽古譜とその解読における諸問題 - 主として琵琶譜について - 」『伝承と記録』pp. 15-42 東京: 岩波書店(岩波講座 日本の音楽・アジアの音楽 第4巻)

## センターニュース

(2001.01.01 ~ 2001.12.31)

## &lt;人事・採用及び異動発令&gt;

平成 13 年 3 月 31 日

特別研究員 井澤壽治 (任期満了)  
 特別研究員 山田智恵子 (任期満了)  
 研究補助員 四宮豊 (任期満了)

平成 13 年 4 月 1 日

特別研究員 上杉紅童 (継続採用)  
 特別研究員 尾関義江 (継続採用)  
 特別研究員 中原香苗 (継続採用)  
 特別研究員 岡田万里子 (新規採用)  
 特別研究員 和田一久 (新規採用)  
 司書 井口はる菜 (継続採用)  
 研究補助員 伊藤志野 (任期更新)  
 研究補助員 今井敏行 (任期更新)  
 研究補助員 水落学 (新規採用)

平成 13 年 5 月 1 日

事務室事務職員 後藤千香代 (学内教務課  
 へ配置換)  
 事務室事務職員 才田典子 (学内総務課か  
 ら配置換)

## &lt;客員研究員受入れ&gt;

平成 13 年 11 月 6 日 ~ 24 日

客員研究員 Prof. Dr. Tilman SEEBASS (イン  
 スブルック大学音楽学研究所所長)  
 受入研究室: ネルソン研究室  
 テーマ: 「音楽図像学の諸方法論を日本伝  
 統音楽研究へ適応するには」  
 ゼーバス氏の来日は日本学術振興会外国  
 人招聘研究者制度により可能となった。

平成 13 年 12 月 1 日 ~ 22 日

客員研究員 Dr. Allan MARETT (シドニー大  
 学音楽学科長)  
 受入研究室: ネルソン研究室  
 テーマ: 「『南宮琵琶譜』・『博雅笛譜』の  
 文献学的基礎研究」  
 マレット氏の来日はシドニー大学研究開  
 発援助制度により可能となった。

## &lt;大学・センターの一般公開事業&gt;

研究センター開所記念シンポジウム「今、  
 なぜ日本伝統音楽か」(平成 12 年度第 1 回  
 公開講座)

実施日・所: 平成 13 年 3 月 10 日 (土) 午  
 後 2 時 ~ 4 時 キャンパスプラザ京都 5

## 階 第 1 講義室

内容:

1. 挨拶 西島安則 (京都市立芸術大学学長)
2. 設立の経緯と問題提起 廣瀬量平 (日本  
 伝統音楽研究センター所長)
3. 記念演奏 「尺八独奏のための鶴林」(廣  
 瀬量平作曲) 山本邦山 (都山流尺八奏  
 者・東京芸術大学邦楽科教授)
4. パネルディスカッション

コーディネーター・司会 廣瀬量平 (作  
 曲家・日本伝統音楽研究センター所長)  
 パネリスト

小島美子 (国立歴史民俗博物館名誉教授、  
 日本音楽史)

前田昭雄 (ハイデルベルク大学教授、音  
 楽学)

井上章一 (国際日本文化研究センター助  
 教授、建築史・意匠論)

進行 久保田敏子 (日本伝統音楽研究セン  
 ター教授)

実施報告は本報 pp. 18 ~ 21 に掲載。

研究センター特別講演会 “Ways of thinking  
 about East Asian images of music” (「東ア  
 ジアにおける音楽図像をどう考えるか」)

実施日・所: 平成 13 年 11 月 21 日 (水) 午  
 後 3 時 ~ 4 時 30 分 キャンパスプラザ京  
 都 4 階 第 2 講義室

講演者: Prof. Dr. Tilman Seebass (ティルマ  
 ン・ゼーバス博士、インスブルック大学  
 音楽学研究所所長)

通訳: 勝村仁子 (国立音楽大学・慶應義塾大  
 学講師)

研究センター平成 13 年度発足のプロジェク  
 ト研究「日本伝統音楽を対象とする音楽図  
 像学の総合研究」の顧問として来日した  
 ゼーバス氏による特別講演会を公開で実施  
 した。

当日配布された概要より:

1. Painter versus musician  
 「画家」対「音楽家」
2. Organological approaches in Western scholar-  
 arship  
 西洋の研究における楽器学的アプローチ
3. Iconography and its use for reconstruction  
 図像学と、復元への利用
4. Organology versus iconography  
 「楽器学」対「図像学」
5. Visual object and visual meaning, or the  
 signifier and the signified  
 視覚の対象物と視覚的意味、あるいは「意

- 味するもの」と「意味されるもの」
6. The potential and the power of the visual—first example  
視覚的なもの可能性と力：第一の例
  7. The potential and the power of the visual—second example  
視覚的なもの可能性と力：第二の例
  8. Modes of thought—West and East  
思考方法：西洋と東洋

研究センタ - 平成13年度第1回公開講座  
「現代邦楽への招待」  
実施日・所：平成13年11月28日（水）午後6時30分～8時30分 京都芸術センター  
1階 フリースペース  
内容：

1. お話：「現代邦楽の成立と発展」  
長廣比登志
2. 演奏：宮城道雄作曲 手事 から第3楽章  
「輪舌」 箏 島田重弘  
諸井誠作曲 竹籟五章 から第4章「芬  
陀」および第5章「明暗」  
尺八 三橋貴風  
廣瀬量平作曲 「みだれ」による変容  
十七絃 島田重弘  
廣瀬量平作曲 魂ふり 尺八 三橋貴風
3. 座談：「作品をめぐる」  
出演 島田重弘  
三橋貴風  
廣瀬量平  
聞き手 長廣比登志

伝統楽器をつかった多種多様な音楽シーンが、日常的に展開している。伝統楽器の能力以上のものを要求する音楽や、伝統楽器のうしなわれた音空間から発想する音楽、伝統の中ではコラボレーションできなかったあたらしい編成の合奏、など。現在、こうした創作活動と作品にたいして、現代邦楽とよんでいる。ごく一般的には、邦楽器の現代音楽という認識もあるが、中には、伝統的な響きの濃厚な作品を、創作邦楽とよび、あえて現代邦楽とよばない向きもある。

今回の公開講座では、こうした創作活動と演奏活動の中核を担った、箏曲界と尺八界に焦点をあて、それぞれの現代を代表する名演奏家、箏と十七絃の島田重弘氏と、尺八の三橋貴風氏の演奏をまじえながら、宮城道雄に端を発するといわれる現代邦楽の成立と発展の足跡をさぐる。演奏曲は、箏属の作品で、古典箏曲の「みだれ」を、古典の形式から離れて洋楽の楽式に導入した宮城

道雄の「手事」（1947年）から「輪舌」おなじく「輪舌」を引用しつつ、日本人とコトの関係を通して現代の音の世界にもちこんだ廣瀬量平の「みだれ」による変容（1980年）、つづいて尺八の作品で、古典尺八演奏の、強烈な身体性に触発されて作曲した諸井誠の「竹籟五章」（1964年）から「芬陀・明暗」日本人の内奥に聞こえ鳴りひびく、原初的な音にさわたった廣瀬量平の「魂ふり」（1982年）を聞く。（長廣比登志記）

< 大学・センターの出版物 >

『京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 所報』第1号 2001年3月 A5 44 pp. 編集・発行人：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 廣瀬量平

『京都市立芸術大学 概要 2001年』A4 24 pp. 発行：京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター紹介 pp. 10～11）日本伝統音楽研究センター教員（p. 18）

『京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 概要 2001』B4 変形観音折 発行：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 配布は2001年11月以降（書式を若干改めて、本報 pp. 50～51に所収）

*Research Centre for Japanese Traditional Music, Kyoto City University of Arts, 2001*（上記概要の英語版）B4 変形観音折 発行：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 配布は2001年11月以降（書式を若干改めて、本報 pp. 52～54に所収）

< インターネットホームページ掲載 >

京都市立芸術大学ホームページ「大学案内」の日本伝統音楽研究センター部分を更新（2001.02.28）。内容を

「日本伝統音楽研究センター概要 2000」  
<http://www.kcuu.ac.jp/about/rc-jtmj.html>  
と

「Research Centre for Japanese Traditional Music Kyoto City University of Arts, Outline of Centre 2000」

<http://www.kcuu.ac.jp/about/rc-jtme.html>  
として改訂。

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターのページを開設（2001.10.01）

センターが独自に運営する公式なページ

として、大学公式ページからリンクするように変更。「大学案内」からのリンク先もセンターのページに変更した。以後、公開講座や特別講演会などの催事予告と報告を掲載中。

#### 日本語版トップページ

<http://www.kcuu.ac.jp/jtm/index.html>

内容は、概要2000、概要2001、所報創刊号オンライン掲載

#### 英語版トップページ

<http://www.kcuu.ac.jp/jtm/en/index.html>

内容は Outline of Centre, 2000、Outline of Centre, 2001

#### <プロジェクト研究>

「日本伝統音楽を対象とする音楽画像学の総合研究」

研究代表者：スティーヴン・G・ネルソン

\* 発足の経緯、および2001年7月上旬までの経過

研究代表者ネルソンは長い間、日本、ひいては東アジアにおける音楽画像学の可能性について大きな関心を持っていた。1980年代には、アメリカにおける音楽画像学の牽引役を果たしていた Barry S. BROOK 氏と接触を持ち、さまざまな形で助言を頂いた。熟慮の結果「まずは文献から」という方向を決めて、文字による文献資料を中心に研究を進めてきた。90年代に入ると、総合大学で音楽専攻ではない学生に日本音楽に関する講義を受け持ち、特に日本語の読み書きができない留学生を相手に日本音楽概論を教えるようになってからは、画像資料が持つ「わかりやすさ」「明瞭さ」という特質を強く意識するようになった。そして音楽史を教える上で画像資料が不可欠であること、同時に、それらを使用するに当たっては留意すべき点もいろいろあることなどを認識するに至った。関心がいよいよ強くなったきっかけは、1999年広島で開催されたICTM(国際伝統音楽学会)の第35回世界大会の際に来日していた Tilman SEEBASS 博士と話し合う機会を得たことである。オーストリア、インスブルック大学の教授であり、永年ICTMの音楽画像学部の会長の Chairman を勤めており、現在、音楽画像学という分野においては世界的な権威といえる研究者である。

ゼーバス教授は、日本および東アジアの音楽画像学の進展に貢献したいという構想を長らくあたためており、ネルソンとの交流の中でもその主旨がたびたび示されてき

た。2000年4月に京都市立芸術大学に日本音楽研究センターが設置され、助教授に着任したネルソンは、共同研究を企画できる立場になった際、研究センター発足当初すでに「日本を中心とした東アジアの音楽画像学プロジェクト」を呼び掛けた。その結果、初年度には準備段階として「音楽画像学の基礎研究」という題名で、民族音楽学者の勝村仁子氏に、重要論文の訳出を委託することとなった(本号39ページ参照)。

2001年度から、2000年度開始の共同研究に加え、新たに長期計画の「プロジェクト研究」を立ち上げることになり、ようやく機が熟した感があったので、4月の教授会・懇談会から討議を開始した。その結果、プロジェクト研究への参加を、関連分野の専門家に広く呼び掛けることとなり、個人的な呼び掛けに加え、2001年5月12日に行なわれた東洋音楽学会・日本音楽学会関東支部の合同例会(シンポジウム「音楽画像学の可能性」司会：秋岡陽氏)で、ネルソンが研究プロジェクト構想について発言し、企画された研究集会での発表の応募を呼び掛けた。嬉しい悲鳴をあげるほどの反応で、6月22日付けの第1回サーキュラーの時点では、蒲生郷昭氏・ゼーバス氏・福島和夫氏の3人を顧問に迎え、センター教員を含めて約30名のプロジェクト・メンバーの参加が予定された。

一方、5月27日に東京の国際文化会館で開かれた IAML(国際音楽資料情報教会)日本支部の総会で、ネルソンがプロジェクト構想について発言して、本部への報告事項に加えることになった。その役を果たしたのは研究センターの高橋美都助教授で、IAMLの大会(フランスのペリグ Pèrigueux 市、7月8～13日)で開かれた RidIM(Répertoire international d'iconographie musicale 国際音楽画像目録)の部会で、下記の英文資料を配布し、プロジェクト研究の主旨・目的などについて報告を行なった(高橋エッセイ参照)。

以下の文(主旨、日程・開催地・テーマ・内容)は、2001年度の開催決定に伴い、プロジェクト・メンバーに発せられた、2001年6月22日日付けの第1回サーキュラーからの、部分的に表記を改めた引用である。

#### 主旨

音楽画像学とは美術作品・視覚的資料における音楽的な題材や主題の、分析・解釈を



扱う学問分野である。欧米ではこの20年ほどで目覚ましい研究成果が上がっている。日本には、資料の体系的収集と整理、目録作りなどの先行例があるが、今回の長期プロジェクトでは、まず方法論の検討から始め、写真複写、印刷、画像データの処理などの技術面の進歩に伴う新しい可能性の開拓までを含め、関連諸学の専門家の協力を仰いで、総合研究を行ないたいと思う。

今年度は下記の通り、表題のテーマによる2日間の研究集会を3回企画し、研究史の検討、方法論の提案、個別の研究事例報告と全体討論を含む研究計画で開催する。

日程・開催地・テーマ・内容：

\* 第1回研究集会

「音楽図像学の方法論をめぐって」

2001年7月28日午後1時半～5時、29日午前9時半～午後4時

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 7階 合同研究室1

研究代表者や研究センター関係者が中心となり、音楽図像学の方法論・研究史について総括し、今後の研究方針を定める基調報告をする。日本における従来の研究成果のいくつかについても担当した方から報告をしてもらう予定。

\* 第2回研究集会

「日本伝統音楽における音楽図像学に関する研究報告」

2001年11月17日午後1時半～5時、18日午前9時半～午後5時

上野学園日本音楽資料室（東京）  
オーストラリア、インズブルック大学音楽学研究所所長のティルマン・ゼーバス教授の基調講演を予定している。研究プロジェクト・メンバーによる研究報告（5・6件）と全体討論を行なう。上野学園日本音楽資料室の協力による特別展観（音楽図像学資料関連）も同時に行なう予定。

\* 第3回研究集会

「日本伝統音楽における音楽図像学に関する研究報告」

2002年2月16日午後1時半～5時、17日午前9時半～午後5時

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 7階 合同研究室1

研究プロジェクト・メンバーによる研究報告（7・8件）と全体討論を行なう。今後の活動方針（研究や出版、学会の発足など）に関しても検討する。

**Report on the Long-term Research Project, "The music iconography of the traditional music of Japan"**

*The following information was distributed by Associate Professor TAKAHASHI Mito when she reported on the research project at RIDIM (Répertoire international d'iconographie musicale) sessions at the 19th Congress of IAML (International Association of Music Libraries, Archives and Documentation Centres), held in Périgueux, France, 8-13 July, 2001.*

The Research Centre for Japanese Traditional Music of Kyoto City University of Arts, newly founded in April 2000, is planning as one of its long-term research projects an investigation of the possibilities for applying the methods of music iconography in historical research on Japanese traditional music. In fiscal 2001 (April 2001 to March 2002) a total of three research meetings are to be held, as follows:

1. July 28-29, 2001, at the Research Centre for Japanese Traditional Music.

Focus in this first meeting will be the methods of musical iconography, including a survey of the development of the field in the West, and an initial exploration of possibilities for similar research in the field of Japanese traditional music. There will also be reports about earlier research projects of a similar nature already undertaken in Japan from scholars who participated in them.

2. November 17-18, 2001, at the Research Archives for Japanese Music of Ueno Gakuen University, Tokyo.

At the beginning of the second research meeting, a keynote address is to be given by Prof. Dr. Tilman SEEBASS of the Leopold Franz University Innsbruck, a leading European scholar in the field of music iconography, who is to be invited to Japan subject to the award of a grant from the Japan Society for the Promotion of Science (JSPS). This will be followed by individual case studies of examples of Japanese art which depict music instruments and scenes of music making. In conjunction, an exhibition of musico-iconographical materials from the collection of the Research Archives for Japanese Music is planned.

3. February 16-17, 2002, at the Research Centre for Japanese Traditional Music.

At the third research meeting, focus will be on individual cases studies, with some discussion of future research plans and publishing projects.

Should they prove suitable, several of the case studies of the second and third meetings will be prepared for publication in *Imago Musicae*.

Project leader: Steven G. NELSON (associate professor, Research Centre for Japanese Traditional Music, Kyoto City University of Arts).

Advisers: FUKUSHIMA Kazuo, GAMOO Satoaki, Tilman SEEBASS.

Participants from the Research Centre: KUBOTA Satoko (professor), TAI Ryuichi (associate professor), TAKAHASHI Mito (associate professor). Members of the research group: A total of approximately 25 scholars from the fields of music history, folk music, organology, ethnology, art history, and literature will participate in principle in all meetings. The main aim of the research project in its first years is to build up a solid interdisciplinary body of scholars with a common understanding of the methodological issues involved in the application of music iconography to the study of the history of Japanese music. (スティーヴン・G・ネルソン記)

「楽器の復元に関する総合研究」

研究代表者：高橋美都

\* テーマ設定の経緯、2001年7月上旬までの経過

「音楽画像学プロジェクト」に関しては前年度からの討議を経て、満を持して開始する機運であったが、小さな組織で複数のプロジェクト並立を危惧する声もあった。画像学への一本化の声も強かったなかで、計画が先行していた画像学ともゆるやかに連携し、参加メンバーの研究領域や関心の相乗効果がのぞめる分野をテーマとして設定したらどうかという意見が、5月の懇談会でまとまった。美術・工芸の領域と音楽の領域との連携、保存や修復に関する研究、データ収集の方法論などでは、二つのプロジェクトの同時推進によって互いに寄与するところが大きいと想定できた。参加メンバーを分離するか統合するか、研究集会を別途実施するか同時開催するか、分科会方式にするかなど、手探りの状態のうちに6月が過ぎ、7月上旬は、ようやく参加メンバーは統合、研究集会も同時開催という線が固まりつつあった段階であった。画像学の日時設定などが先行しており、「楽器の復元」に関してのディスカッションなどは今年度中に本格実施をするとういのではないかと考えてい

る。(高橋美都記)

プロジェクト研究実施報告

第1回研究集会

会場：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室1(7階)

2001年7月28日(土)

司会：久保田 敏子

所長挨拶 廣瀬 量平

趣旨説明

研究代表者(画像学) S・G・ネルソン

研究代表者(楽器) 高橋 美都

プロジェクト・メンバー自己紹介

音楽画像学プロジェクト基調報告

勝村 仁子 S・G・ネルソン

懇親会(アークホテル京都、四条大宮)

2001年7月29日(日)

司会：久保田 敏子

プロジェクト・メンバー自己紹介補足

楽器の復元について 富原 靖

報告：IAML(国際音楽資料情報協会)にお

けるRIDIM(国際音楽画像資料目録)部会

について 関根 敏子 高橋 美都

国立音楽大学音楽研究所音楽画像学研究部

門の活動について——特殊研究：阿弥陀

来迎図に描かれた楽器の変遷—— 田島

みどり

総括・今後の予定について

S・G・ネルソン 高橋 美都

参加者

28日 研究プロジェクトメンバー23名、オ

ブザーパー2名、センター教員5名

29日 顧問1名、研究プロジェクトメンバー

22名、オブザーパー3名、センター教員

4名

第2回研究集会

2001年11月17日(土)

音楽画像学関係史料 特別展観

主催：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究

センター

協賛：上野学園日本音楽資料室

会場：上野学園日本音楽資料室

1.〔古楽図〕(信西古楽図)

(1)写本 折帖 一帖(楽歳堂本)

(2)写本 卷子 一軸

2.舞楽図 写本 折帖 二帖

3.琵琶之由来 写本 卷子 一軸

4.〔雅楽図譜〕写本 卷子 七軸

(1)清涼殿神楽等25図

(2)紫宸殿舞楽左右32曲図 巻尾「明治十

四年六月写了千虎」

- (3) 東庭小御所舞樂左右 32 曲図(管絃舞樂) 巻尾「明治三十二年四月千虎写了」  
(4)(5)(6) 舞樂装束および甲・面・太刀・靴等の舞具  
(7) 舞具および楽器  
川崎千虎(1835-1902)筆
- 5.〔姫路侍従参内記〕写本 巻子 一軸  
6. 勸進能之図 写本 折帖 一帖  
7. 寺子小謡四季友 版本 袋綴 一冊  
天保14年(1843)山本長兵衛刊  
8. 糸竹初心集 版本 袋綴 一節切・筆・三味線入門書 中村宗三編  
(1) 寛文4年(1664)秋田屋刊 分冊本下巻零本  
(2) 寛文4年秋田屋刊 上中下合1冊 後印  
(3) 寛文4年秋田屋刊 菱田屋治兵衛後印上中下合1冊  
(4) 寛文12年(1672)鶴屋喜右衛門刊 上中下合1冊
- 参考史料 笛製考 / 御樂初御遊之時小御所構様之図 / 紙鶯 / 知音之媒 / 大怒佐 / 尺八通俗集 / 童舞抄「舞台之図」(光悦謡本表紙) / 光悦謡本数種
- 研究プロジェクト 第2回研究集会  
会場: 東京芸術大学音楽学部大会議室(5号館地下)  
司会: 久保田 敏子  
挨拶 研究代表者 S・G・ネルソン  
基調講演 ティルマン・ゼーバス  
“Ways of thinking about East Asian images of music”(東アジアにおける音楽画像をどう考えるか)  
通訳: 勝村 仁子  
プロジェクト・メンバー自己紹介補足  
プレゼンテーション1 竹内 有一  
「近世外来系の楽器画像の諸問題——長崎版画を中心に——」  
コメンテーター 山寺 三知 富金原 靖  
懇親会(江戸名物豆富料理「笹之雪」)  
2001年11月18日(日)  
司会: 久保田 敏子  
プレゼンテーション2 遠藤 徹  
「描かれた舞樂とその背景——一遍聖絵を中心に——」  
コメンテーター 加須屋 誠 高橋 美都  
プレゼンテーション3 谷本 一之  
「画像が呼び寄せる音楽」  
コメンテーター 田井 竜一 勝村 仁子  
昼食  
プレゼンテーション4 樋口 昭

- 「洛中洛外図から読みとる中世の音」  
コメンテーター 入江 宣子  
プレゼンテーション5 由比 邦子  
「密教図像としての弓形邦布」  
コメンテーター 泉 武夫 中溝 一恵  
総括、および今後の予定について  
S・G・ネルソン  
参加者  
17日 顧問1名、研究プロジェクトメンバー21名、オブザーバー8名、センター教員4名  
18日 顧問1名、研究プロジェクトメンバー17名、オブザーバー3名、センター教員4名

< 共同研究 >

「邦楽歌詞研究I - 地歌・箏曲 -」  
研究代表者: 久保田敏子  
共同研究員: 井口はる菜、小野恭靖、佐々木聖佳、鈴木由喜子、長池健二、スティーヴン・G・ネルソン、野川美穂子、真鍋昌弘、山根睦宏  
\* 文学と深い関係を持つ邦楽の歌詞の研究を、音楽学と歌謡学の両面から研究するべく立ち上げた共同研究は、まずは「地歌」の原点ともいふべき「三味線組歌」から開始した。昨年の後期で「表組」の研究発表が一段落。本年度からは「派手組」「裏組」に入った。研究員が曲を分担し、各歌詞の伝承上の異動、関連歌謡、語釈、考察などの発表に基づき、問題点を指摘しあい、議論をするという形で進めているが、中世の流行歌をちりばめた三味線組歌の歌詞は奥が深く、興味深い成果が期待できる。(久保田敏子記)

「山車囃子の諸相」(2000年度)・「ダシの祭り」と囃子の諸相」(2001年度)  
研究代表者: 田井竜一  
共同研究員: 青盛透(京都学園大学助教授・日本中世史)、入江宣子(仁愛女子短期大学非常勤講師・民俗音楽学)、岩井正浩(神戸大学教授・音楽学)、植木行宣(京都学園大学教授・日本芸能文化史)、垣東敏博(福井県立若狭歴史民俗資料館学芸員・民俗学)、樋口 昭(埼玉大学教授・日本音楽史)、福原敏男(国立歴史民俗博物館助教授(2001年4月より日本女子大学助教授)・歴史民俗学)、増田 雄(三重県立上野高等学校非常勤講師・歴史学)、米田 実(水口町立歴史民俗資料館学芸員(2001年4月より同資料館館長心得)・民俗学)

\*本共同研究をたちあげた背景については、所報創刊号の研究代表者のエッセイ(pp. 23 ~ 24)に、およびその概要については同じく創刊号の共同研究の項(p. 30)にそれぞれ掲載されている。そこでここでは、共同研究員に共有され、共同研究のパラダイムになっている事柄についてしるすことにしたい。

共同研究員の一人である植木行宣氏は、ダシの祭りにおける「はやすもの」と「はやされるもの」という概念を提唱されている。すなわち、山・鉦・屋台などは「はやされるもの」で、それらがうごくのをはやしたてる囃子が「はやすもの」であり、その相互関係の把握が重要なのである。これをふまえて本共同研究では、各回のテーマごとに極力、民俗学・歴史学等の専門家と音楽学の専門家がペアになって発表をおこない、両者の関係を常におさえるようにこころがけている。

2001年1月～12月に実施した共同研究会は、以下の通りである(場所はいずれも、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室1ないしは2)。

- \* 2000年度第2回研究会 2001年1月6日(土) テーマ: 若狭の山車祭りの諸相、(1)垣東敏博「若狭小浜の山車の歴史と性格の変化～練物 人形山 囃子屋台～」、(2)入江宣子「小浜放生会: 山車の囃子と神楽の囃子」、(3)総合討論
- \* 2000年度第3回研究会 2001年2月11日(日) テーマ: 画像にみる祭礼と囃子の世界、(1)福原敏男「祭礼画像の研究」、(2)入江宣子「絵画史料でたどる江戸囃子の形成」、(3)総合討論
- \* 2001年度第1回研究会 2001年4月7日(土)、8日(日) テーマ: 牛久保・八幡社の若葉祭り(愛知県豊川市牛久保町)の諸相、総合討論
- \* 2001年度第2回研究会 2001年5月19日(土) テーマ: 長崎くんちの諸相、(1)国立歴史民俗博物館制作の民俗誌映像試写[解説: 福原敏男、コメンテーター: 植木行宣]、(2)総合討論
- \* 2001年度第3回研究会 2001年7月21日(土) テーマ: 水口祭りの諸相、(1)米田実「水口曳山祭の成立と展開」、(2)田井竜一「水口曳山囃子をめぐる5つのトピックス」、(3)総合討論
- \* 2001年度第4回研究会 2001年12月9日(日) テーマ: 伊賀上野天神祭りの諸相、

- (1)上野市制作の映像上映[解説: 増田雄]、(2)増田雄「伊賀上野天神祭 その歴史と囃子」[コメンテーター: 田井竜一]、(3)総合討論

なお、「山車」とかいて「だし」とよませる用法は、折口信夫の著作によって一般にも広く知られ、つかわれるようになった。しかし、そうした用法の誕生はかなり新しく、かつ担い手の概念とずれていることが、共同研究を実施していく中で明らかになった。そこで2年目には、元々は鉦や笠鉦の部分名称である民俗語彙の「ダシ」を拡大解釈して、山・鉦・屋台の祭りを総称するものとし、研究テーマをあらためることにした。(田井竜一記)

「琴・箏の系譜・楽器、文献と奏法」研究代表者: スティーヴン・G・ネルソン 共同研究員: 青木洋志(上野学園日本音楽資料室研究員) 磯水絵(二松学舎大学教授) 遠藤徹(東京学芸大学専任講師) 久保田敏子(日本伝統音楽研究センター教授) 吉井幸男(京都大学修業員。2001年度から参加) 福島和夫(上野学園日本音楽資料室室長。2000年度のみ) 和田久一(福井工業大学講師 日本伝統音楽研究センター特別研究員)

\*本共同研究の概略については前号ですでに述べたので、ここではこれまで行なった具体的な作業を簡単に紹介する。

1. 『日本三代実録』の音楽関係項目について: 毎回輪読という形で読み進めた。2001年12月までに、天安2年(858)8月から貞観11年(869)12月までの本文の検討を終了。和田研究員が準備した本文・訓み下し文を用いて、研究員全員がそれぞれ個別の月を担当。本文・訓み下し文を検討し、問題点を割り出し考察を加えた。
2. 『仁智要録』の本文研究: 巻第一の本文全体(「筆案譜法」・「調子品」・それぞれの調子の「絃合」・「撥合」・「品絃」・「調子」など) および巻第六「平調曲」の本文の一部(《三台塩》～《五常楽》)について検討し、写本の校合を行なった。
3. 箏の奏法について: 『仁智要録』巻第一の全体について検討した。
4. 個人の研究発表・報告: 2001年度から、各研究員の研究発表・報告の時間を設けた。12月までに次のものが行なわれた。

「詠について」(磯)

「『六国史』に現れた琴箏」(和田)

「楽制改革再考 - 呂律及び左右両部制を

めぐって -」(遠藤)

「2001年1月PNC香港会議報告」(ネルソン)

『『類争治要』に引用された漢籍について』(青木)

『『日本三代実録』冒頭の童謡(わさうた)について』(磯)

「楽制改革再考 - 唐楽新作曲をめぐって -」(遠藤)

2000年度

\* 第4回研究会 2001年1月27日(土) ~ 28日(日)

\* 第5回研究会 2001年2月10日(土) ~ 11日(日)

\* 第6回研究会 2001年2月24日(土) ~ 25日(日)

\* 第7回研究会 2001年3月11日(日)

\* 第8回研究会 2001年3月18日(日) ~ 19日(月)

2001年度

\* 第1回研究会 2001年4月14日(土) ~ 15日(日)

\* 第2回研究会 2001年5月20日(日)

\* 第3回研究会 2001年6月16日(土) ~ 17日(日)

\* 第4回研究会 2001年10月6日(土)

\* 第5回研究会 2001年12月8日(土) ~ 9日(日)

研究会は、上野学園日本音楽資料室および東京学芸大学で行なった2000年度第5回研究会を除いて、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターで行なった。(スティーヴン・G・ネルソン記)

<特別研究員研究報告>

井澤寿治 「上方座敷歌の研究」(平成12年度)

上方座敷歌の伝承は現在非常に困難な状況になっており、その記録作成は急務と考えられる。そこでまずその音源の収集と歌詞の書き取りの作成をおこなった。その対象として、上方の色里で歌われたと考えられる曲は、歌の発生地が上方でなくても網羅することにした。音源の収集は約1年がかりで、録音テープ4本分、135曲を収録した。その内容は、万寿(祇園出身)はん幸(南地出身)というベテランの2人の芸妓の座敷歌を中心に、お座敷で収録した散財曲(宴会時に太鼓や手拍子などで囃す賑やかな曲)も一部含まれる。そして、収集した資料をもとに、歌詞の書き取りをおこなった。その

際、元歌の歌詞は当然のことながら、替え歌についても調べ得る限り記載するようにした。たとえば、「ぎっちょんちゅん節」などは天保年間の座敷歌として流行したが、日清戦争(1894年)の際に士気を鼓舞する為に替え歌が作られた。それらの歌詞も参考のために記載した。なお、歌の解釈に関しては、座敷歌の性格上、暗喩、比喩などが多く、いろいろな角度から検討して歌の持つ深い意味を探索する必要がある。これについては今後の課題としたい。

上杉紅童 「日本古代の岩笛および土笛の音響的・楽器学的研究」(平成12~13年度) 縄文遺跡などから発見される石笛(石に孔が穿たれたもの)は、古い楽器とされており、今日でも同種のもは神社や宗教者の間で保存重用されている。

小原弘万(ひろかず)さんは日本全国にわたってその石笛を多量に収集され、一冊のノートに整理された。このセンターでの私の調査は小原氏の遺品である120余点の石笛の実態記録を基本としている。まず、形態をデジタルカメラで撮影し、孔の状態を計測した実測図を作成した。更に、吹奏の結果得られる音高や倍音の発生状況、音圧等による音変化などを可能な限り録音テープやノートに記録することであった。なお、小原氏の収集品はすべて天然の堆積岩による石笛であるが、その調査はすでに92点を終えた状況である。

研究テーマに関連する活動

2000年10月4日高崎芸術短大ワークショップII「陶■の合奏」自作自演の授業 / 10月9日「縄文祭り」の開催されている川崎市民ミュージアムでプロムナードコンサート / 10月30日「八雲古代琴の夕」に古代笛でゲスト出演~和音(東京・日暮里) / 11月3日飛ノ台縄文博物館の開館式典で古代笛を演奏 船橋市 / 12月6日「日本作曲家協議会作品発表」村尾幸映作曲: 古代笛、オカリナと尺八の対話 すみだトリフォニーホール

2001年2月1日柴田南雄作曲「府中三景」に石笛で出演 府中市芸術劇場 / 6月23日「縄文学講座~縄文人の音世界にせまる」レクチャー、演奏。鼎談: 広瀬量平、小山修三、梅原猛 福井県三方町 / 7月15日「第41回運を観る会」に古代笛でゲスト出演 府中市 / 7月24日~8月2日「メシアン音楽祭(南仏ラ・グレーヴ)笛、尺

八の演奏で参加 / 8月16日～20日第16回都留音楽祭「東西古楽の祭典」東洋古楽のレッスンとコンサート 山梨県都留市文化会館 / 9月29日「いにしえの土の響～古代笛とオカリナーによるアンサンブル」廣瀬量平「石と土による古代の詩」ほか 高崎市 / 10月6日第29回日文研公開セミナー「音から探る縄文文化」『縄文人のさいた音、奏でた音』講演と石笛演奏 国際日本文化研究センターホール / 12月5日第6回「日本作曲家協議会作品展」村尾幸映：笛の詩～石笛・能管・篠笛・オカリナー

岡田万里子「江戸時代後期の上方の歌舞伎音楽の研究」(平成13年度)

京都の花街祇園に伝承される井上流の舞には、「江戸歌(上方唄)」と区分される特徴的な伝承曲群がある。「江戸歌」は、当初、江戸から流入した長唄をさしたが、その後、範囲を拡げて行く。この過程を、板行された江戸歌正本を研究することにより明らかにするほか、豊後系浄瑠璃や義太夫節浄瑠璃をも包含していった、江戸時代後期の上方の音楽の特質を考察する。広範囲な「江戸歌」の成立には、上方劇界の事情や曲本板行の複雑な状況が考えられるため、番付や台帳等の上方の歌舞伎資料から、音楽関係の記録を抜き出し、上方の歌舞伎音楽の体系的整理を行う。

研究テーマに関連する口頭発表

2001年6月3日『「江戸歌」をめぐる』  
藝能史研究会大会、キャンパスプラザ京都

尾関義江「学校における邦楽教育方法論の研究」(平成12～13年度)

新学習指導要領実施を間近にして、各地の教育委員会や大学において、和楽器講習会や実習授業が行われています。限られた時間の中で、音を出すことの楽しさと、優れた演奏技術をいかに能率良く伝えるか、いかに魅力的な教材を紹介するかが、課題となっています。小学校に初めて箏を持ち込んで以来20年。子ども達は目を輝かせ、生き生きと活動しました。試行錯誤から、色々なノウハウも見つかりました。楽器の管理やメンテナンス・指導法・教材・・・と、細ごまとした事柄ですが、現場の指導者にとって必ず役立つものであると輝きます。ここでは、以前の取り組みを見直しながら、

より楽しい邦楽教育のあり方を考えていきたいと思っています。

研究テーマに関連する活動

堺市教育委員会 中学校音楽科研修 和楽器講習会(箏・三味線・囃子) / 泉南市教育委員会 中学校音楽科研修和楽器講習会(三味線) / 奈良教育大学 音楽文化実習 公開授業 舞台演奏への取り組み 発表演奏会(長唄) 越後獅子・五郎・末広がり

中原香苗「中世楽書とその周辺に関する研究」(平成12～13年度)

中世楽書の基礎研究及び各楽書固有の問題について研究を進めている。楽書の基礎研究としては、鎌倉時代後期成立の狛朝葛撰『統教訓抄』、室町時代中期成立の豊原統秋撰『體源鈔』について、伝本の調査を行い、拠るべき善本の確定、及び本文校合等の作業を進行中である。各楽書固有の問題としては、宮内庁書陵部に蔵される『陵王荒序』なる舞譜について、狛近真撰『教訓抄』との関連について論じた。さらにこれと春日大社に現存するいわゆる「春日楽書」との関係についても論じる予定である。『體源鈔』に関しても、その複雑な構造を解き明かすべく考察を進めている。また、これと周辺諸領域との関連を考えるため、引用文献の検討を行っている。

研究テーマに関連する論文

「宮内庁書陵部蔵『陵王荒序』考 『教訓抄』との関連について」(池上洵一編『論集 談話と談話集』、和泉書院、平成13年5月刊)

山田智恵子「義太夫節研究における音楽の視覚化」(平成12年度)

音楽学の研究対象として義太夫節を扱う際、音楽をいかに視覚化するか、また視覚化された資料をどのように扱うかが重要な問題である。音楽を視覚化したものとして、まず楽譜があげられる。声のパートの楽譜としては丸本・床本があり、三味線のパートには、「朱章」という記譜法が存在する。それらの伝統的楽譜は、音楽のどのような要素を記譜したものかについて検討し、さらに実際の演奏との隔たりについて考察した。その声と三味線の音高と時間関係を同時に視覚化できるものとして、義太夫節の五線譜化の過程と方法についても扱った。

以上のような楽譜以外に、義太夫節には

「語り方・弾き方の教本」類があり、明治期以後の「節尽し」についてもその内容の調査を行った。

研究テーマに関する口頭発表

テーマ：文楽の音楽 - 義太夫節の基本的旋律型

主催：大阪府文化情報センター・大阪音楽大学

大阪音楽セミナー 2001「古今東西音楽考 その16」

場所・日時：大阪府文化情報センターさいかくホール 2001年6月8日

実演：豊竹呂勢大夫・竹澤宗助

和田一久 「『六国史』に現れた和琴」・「京極流百年史編纂」(平成13年度)

テーマ：六国史時代の琴箏

1. 以下のような資料を作成した。それらはマイクロソフト Word 2000 のファイル(.doc)としてMO媒体に保存しており、日本伝統音楽研究センターに寄託し、広く内外の研究者に供給可能である。

(1)「風土記(「風土記逸文」を含む)」音楽記事抜粋

(2)「六国史」時代の琴箏関係記事抜粋

2. 田辺尚雄、林謙三両先達によって示唆されたことからの他、新たに付与できる知見は次の2件。

(1) 神楽に用いられる特異な調弦は、コトがまだ短小であった時代の遺制を踏襲したのであろう。

(2) トビノヲゴトとは、もともと古墳時代のモガリにおける首長権継承の鎮魂の儀式に用いられた小形のコトをいい、頭部が飛翔するトビの尾のように扇状にひろがったコトをさすらしい。

研究テーマに関する口頭発表

「『六国史』に現れた琴箏」共同研究「琴・箏の系譜」の会合にて 2001年5月19日(土)

<委託研究報告> (平成12年度)

「音楽画像学の基礎研究」(委託研究者：勝村仁子)

日本伝統音楽研究センターへの赴任以前から、ネルソンは日本(ひいては東アジア)における音楽画像学の可能性に関心を持ち、着任してからその可能性を探る共同研究をしたいという強い願望を持っていた。音楽画像学はこれまで主としてヨーロッパの美術史と音楽学の中で発展してきた学問領域

であるが、「西洋」という枠を越えて日本(東アジア)の視覚芸術を対象とするならば、それにふさわしい研究方法の構築が求められる。そこで、準備段階として、そうした新しい研究方法の可能性にも配慮しながら音楽画像学を扱った論文の訳出を、民族音楽学者で同様の問題意識をもつ勝村仁子氏に依頼した。話し合いの結果、音楽画像学の権威、インスブルック大学のティルマン・ゼーバス(Tilman SEEBASS)氏の論文(下記参照)の和訳、同氏の執筆による最近出版されたクローブの音楽辞典の「音楽画像学」の項目から「方法」の部分の訳出、及び文献目録を作成してもらった。これらは2001年度に発足した研究プロジェクト「日本伝統音楽を対象とする音楽画像学の総合研究」の基礎資料として、第1回の研究集会の折に、プロジェクト・メンバーに配付した。(ステイヴン・G・ネルソン記)

\* SEEBASS, Tilman, 1992, "Iconography," *Ethnomusicology: An Introduction*, ed. Helen MYERS, London: Macmillan, 238-44 (The New Grove Handbooks in Music).

「舞楽関係映像の記録作成(委託研究者：酒井信好)

地方舞楽や鄙舞楽と称される伝承は、宮廷や畿内社寺でのいわゆる中央の舞楽と共通する演目や技法を持ちながら、民俗芸術化して、それぞれ地域独自の持ち味を有している。全国に伝承されている舞楽を中央の舞楽と比較しながら「舞楽の恒常性」を抽出する今後の研究の基礎資料として、十数年来舞楽を撮影してきた酒井信好氏に写真作品を提供し構成に協力してもらった。今回の対象地域は新潟県能生、静岡県森町、山形県各地と天王寺舞楽である。舞楽写真画像データベースは試作段階で、今後さらに検索の便を工夫することにしたい。まずネット配信形式が可能な写真集(写真総数約250点)の作成を試みた。報告書に代える写真集は第一次の完結をみた。(高橋美都記)

テーマに関連する展示

2000.12.02~2001.01.31 日本伝統音楽研究センター7階合同研究室2「鄙の舞楽 in 京都」

「三曲合奏における尺八の意義」(委託研究者：森田柗山)

地歌・箏曲に尺八が加わる意義はどこにあ

るのか、についての研究に伴い、まず、先行論文の指摘する「尺八の旋律が何に拠っているか」という点について、都山流演奏家としての立場から検証した。その結果、都山流「古曲」の尺八手付けに関しては次のようなことがわかった。

- (1) 流祖中尾都山の手付けは、菊筋菊原家の演奏に基づく。
- (2) 尺八は原則として三弦の旋律を模倣するが、緩徐部分では歌のメリスマに合わせた手付けとなり、長いフレーズにわたることもある。
- (3) 手事の「掛け合い」「下降旋律の付加音」の箇所での尺八は箏に合う。
- (4) 原旋律に対する尺八の旋律変化では、都山流と琴古流との異同が多く、ここに流派の独自性がある。

以上の結果を得たが、流祖中尾都山の後期の手付けでは、拍子も音高も、箏や三弦とは異なる手付けが多く、平凡社刊『日本音楽大事典』にある「元旋律に対して替手または対旋律として作られた例はない」という記述への反証が今後の課題である。(森田松山記)

#### <委託研究> (平成13年度)

井澤壽治(上方活性化研究会会長)「上方座敷歌の研究 - その背景と暗喩について -」  
山田智恵子(京都市立芸術大学非常勤講師)「義太夫節の音楽学的研究 - 『語り』における規範と変形可能性 -」

#### <センターの学外協力>

京都の民謡録音資料に関する協力について

所報創刊号で報告した通り(p.31)、当センターは京都府民謡記録研究会に協力し、1982～1983年にかけて実施された「京都府民謡緊急調査」の録音テープをデジタル化して、保存・活用をはかる共同作業を行っている。既にDATへのデジタル変換作業は終了し、現在は双方が1セットずつ保管するCD-Rの作成を進めている。

センターでは今後も随時、このような外部の団体との学術的な相互協力を行なっていくつもりである。

#### <所員の活動>

廣瀬 量平

著作活動

- \* 2001.02.25 新作初演 (1)「岬のレクイエム Requiem at the Cape - アルトフルートとフルートアンサンブルのための -」野口龍(アルトフルート)(2)「象は翔ぶ Elephant will fly - ピッコロとフルートアンサンブルのための -」清水信貴(ピッコロ) 函館芸術ホール
- \* 2001.04.08 新作初演「春風のロンド RONDO of Spring breeze - フルートアンサンブルのための -」ベルソナ第70回演奏会 東京 練馬文化センター
- \* 2001.05.20 新作初演「ヒミコのうた」1. 暁のふれごと 2. 田のかみへのねぎごと 3. 舟魂へのほぎうた 4. 眞名井すがしき 5. 鳥追ひ 東京女声合唱団 指揮：関屋晋 東京 紀尾井ホール
- \* 2001.05.27 寄稿「アンサンブル金沢をきいて」 北国新聞
- \* 2001.06.20 「現代邦楽・創造の軌跡—廣瀬量平の邦楽作品」 鶴目と演奏者：「瓔」野坂恵子(箏) / 「鶴林」山本邦山(尺八) / 「夢幻砧 - 五段砧による変容 -」深海さとみ(箏・うた) / 「古代歌謡による三つの歌」友淵のりえ(箏・うた)・上杉紅童(篠笛)・岡田知之(打楽器) / 「みだれによる変容」宮下伸(十七絃) / 「十六夜」山本邦山(尺八)・野坂恵子(箏) 企画・構成：小島美子 東京 紀尾井小ホール 主催：新日本鉄文化財団
- \* 2001.07.21 大阪府警察合唱団演奏会指揮「海鳥の詩」廣瀬量平作曲、新作初演「雲」廣瀬量平作曲、和田徹三詩 大阪いづみホール
- \* 2001.09.01 男性合唱組曲「漢詩による五つの歌」楽譜出版 カワイ出版
- \* 2001.09.30 IMC (International Music Council) 世界大会「尺八協奏曲」上演 東京都交響楽団・小泉和裕(指揮) 山本邦山(尺八) 東京芸術劇場大ホール
- \* 2001.10.21 オーケストラアンサンブル金沢演奏会「尺八とオーケストラのための協奏曲」ルドルフ・ヴェルデン(指揮) 山本邦山(尺八) 石川県民ホール 口述活動
- \* 2001.02.17 NHK-FM 放送 関西発ラジオ深夜便 出演「伝統の音色 21世紀に響け」
- \* 2001.02.25 函館芸術ホール 講演「フ



- ルート音楽の今」
- \* 2001.03.10 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 開所記念シンポジウム「今、なぜ日本伝統音楽か」(1) 設立の経緯と問題提起 (2) パネルディスカッション コーディネーター・司会 小島美子 + 前田昭雄 + 井上章一 + 廣瀬量平
  - \* 2001.04.26 講演 高校生のための講演会 演題「春霞の中の私たち」京都新聞社主催 京都東稜高校
  - \* 2001.05.12 ~ 13 企画プロデュース「宮崎県椎葉神楽：尾手納神楽上演」第11回芸術祭典・京 京都仁和寺、観音堂 主催：「芸術祭典・京」実行委員会 運営主管：京都市
  - \* 2001.06.20 対談「現代邦楽・創造の軌跡 - 廣瀬量平の邦楽作品」小島美子 + 廣瀬量平
  - \* 2001.06.28 講演 京都アスニー開館 20周年記念セミナー 古典芸能 伝統と創成 - 能・歌舞伎・文楽の現代的魅力を探る - (III) 人権のドラマとしてのオペラ」京都アスニー 主催：京都市生涯教育振興財団
  - \* 2001.08.18 シンポジウム「日本古典劇の現代性・国際性」パネリスト 大阪国際会議場
  - \* 2001.09.20 同志社女子大学東京講座 講演「西洋音楽の根底にあるもの・そして日本」主催：同志社女子大学・同志社女子大学東京アカデミー
  - \* 2001.09.22 福井県三方町縄文博物館開館一周年記念縄文学講座 講演・演奏・パネルディスカッション「縄文人の豊かな音世界」梅原猛 + 小山修三 + 廣瀬量平
  - \* 2001.10.06 国際日本文化研究センター公開セミナー「音から探る縄文文化」講演「縄文人にとっての音」実演「縄文人のきいた音、奏でた音」国際日本文化研究センター 講堂
  - \* 2001.11.11 解創立20周年記念講演「重力と浮力の間(はざま) - 地に根づく意志(こころ)と天翔ける希求(こころ)」函館市雪河亭
  - \* 2001.11.16 ~ 17 京都若い作曲家による連続展(27・28)プロデュース、司会、解説。主催：京都音楽文化芸術振興財団 京都コンサートホール
  - \* 2001.11.28 日本伝統音楽研究センター平成13年度第1回公開講座「現代邦楽への招待」廣瀬作品「みだれによる変容」島

- 田重弘(十七絃)「魂ふり」三橋貴風(尺八)演奏。作品をめぐる討論に参加。京都芸術センター
- 対外活動
- \* 2001.07.05 日本交響楽振興財団募集オーケストラ曲審査、東京フィルハーモニー交響楽団 東京文化会館大ホール
  - \* 2001.08.01 ~ 04 「地方の時代賞」映像コンクール作品審査 主催：川崎市・神奈川県 川崎市産業文化会館
  - \* 2001.10.17 音楽之友社賞審査会、東京音楽之友社
- 久保田敏子  
著作活動
- \* 2000.12.10 解説『むしぼしの会』CD第6集 GMC-3011 三つ橋勾当「松竹梅」、松浦検校「新浮舟」、光崎検校「千代の鶯」
  - \* 2000.12.30 解説『第一回ビクター邦楽オーディション合格者CDその1、徳丸十盟』ビクター-伝統文化振興財団 VZCG-176、琴古流古典本曲・都山流本曲「鹿の遠音・鶴の巢籠」吹合、中能島検校 + 三代山木検校「松風」、菊岡検校 + 八重崎検校「笹の露」、琴古流古典本曲「巢鶴鈴慕」
  - \* 2000.12.30 『その2、橋本芳子』ビクター-伝統文化振興財団 VZCG-177、山田検校「熊野」、吉沢検校「千鳥の曲」、光崎検校「秋風の曲」、不祥・中能島欣一編曲「岡安帖」
  - \* 2001.03.09 解説『大阪新音新星コンサート』大阪倶楽部、八橋検校「十段之調」、吉沢検校「春の曲」、宮城道雄「比良」「水の変態」、長沢勝俊「春三題」
  - \* 2001.03.16 解説『村木洋子リサイタル~謡曲物II~』京都芸術文化会館、武内検校「鶴亀」、光崎検校 + 八重崎検校「七小町」、藤尾勾当「梓」
  - \* 2001.03.31 書評「蒲生郷昭著『日本古典音楽探究』」『楽劇学』第八号(楽劇学会)
  - \* 2001.04.22 解説『琴友会地歌箏曲演奏会』サンケイホール、三橋検校「四季恋」、菊原琴治「秋風辞」、古川瀧斎「面影」、宮城道雄「手事」、光崎検校「夜々の星」、石川勾当「新青柳」、松嶋検校「落し文」、宮城道雄「菊の栄」
  - \* 2001.05.04 プロデュース + 解説「素浄瑠璃~情を語る~」第11回芸術祭典・京、吉田孝次郎邸、近松門左衛門作「姫山姥」、廓晰の段・足柄山の段
  - \* 2001.05.05 プロデュース + 総合解説『三

- 味線の「味」くらべ』第11回芸術祭典・京、池坊学園こころホール、特徴比較講座「くらべてみれば」、柳川流三弦・九州系三弦・胡弓地歌「鶴亀」、長唄三味線上調「虫の音」、「滝流し」合方、民謡・津軽三味線「民謡アラカルト」、新内流し「蘭蝶」、義太夫三味線「櫓太鼓」、創作曲「豪絃のための作品一番」
- \* 2001.05.19 プロデュース+解説『上方舞～情を舞う～』第11回芸術祭典・京、吉田孝次郎邸、作物「たにし」、繁太夫物「三吉」
- \* 2001.05.20 解説『当道音楽会第120回定期演奏会』厚生年金会館ホール、宮城道雄「虫の武蔵野」、楯山登「時鳥曲」、松阪春栄「楓の花」、幾山検校+松野検校「常磐木」、菊岡検校「竹生島」、光崎検校「千代の鶯」、山下亀之丞+沢村長十郎「野遊び」、菊塚与市「明治松竹梅」、藤永検校移曲「八千代獅子」、松浦検校・津山検校「鳥追・神楽」打合
- \* 2001.05.20 解説『先人の歌を求めて』福本光寿CDアルバムD00EM04451(株)エス・ツウ、伝八橋検校「七夕・橘」打合、藤林検校「貴船」、東明柳舟「峠茶屋」、藤崎検校「神」、松浦検校「しなが鳥」
- \* 2001.05.21 解説『山田流絃のひびき秋岡松韻IV』VZCG-231(財)ビクター伝統音楽振興財団、山田検校「初音曲」・芙蓉の峰、峰崎勾当「東獅子」、江戸半太夫「翁三番叟」
- \* 2001.05.26 解説『国立文楽劇場邦楽鑑賞会』国立文楽劇場、胡弓本曲「蝉の曲」、筑前琵琶「壇の浦」、地歌「髪梳き」、平曲「那須与一」、三曲「御山獅子」
- \* 2001.06.01 解説「浪花十二月～唄の心・舞の心」その一『邦楽と舞踊』6月号
- \* 2001.06.16 解説『宮城道雄をしのぶ箏の夕べ』大阪新音主催、いずみホール、吉沢検校「夏の曲」、松阪春栄「楓の花」、宮城道雄「四季の柳」「湖辺の夕」「道灌」
- \* 2001.07.01 解説「浪花十二月～唄の心・舞の心」その二『邦楽と舞踊』7月号
- \* 2001.07.04～06 解説「伝統音楽と長唄」『第1回国立劇場邦楽鑑賞教室 長唄ってなんだろう』プログラム
- \* 2001.08.01 解説「浪花十二月～唄の心・舞の心」その三『邦楽と舞踊』8月号
- \* 2001.09.17 「菊原初子さんを偲んで」『朝日新聞』全国版朝刊
- \* 2001.10.01 解説『名古屋の芸伝統のオーソドキシイ』CD2001 S-Two Corporation平成13年度文化庁芸術祭優秀賞受賞/平曲「那須与一」、三橋検校「四季の富士」、謡曲もの「藤戸」、胡弓秘曲「鶴の巢籠」、松浦検校「三つ恋慕」、吉沢検校「花の縁」、藤尾勾当「鉄輪」、宇野都「昭君」、稀曲「鉢叩き」
- \* 2001.10.17 解説『組歌の会』紀尾井ホール「箏組歌について」「菜路」「四季曲」「明石」「玉葛」「初音曲」
- \* 2001.10.17 CD解説「山田流四代秋岡松韻作品集」ビクター伝統文化振興財団VZCP-1068「萩三番叟」「帰命namas～恩徳讃」・「桃～雛の節句にちなんで～」・「光明 āloka」・「菖蒲盃～端午の節句にちなんで～」
- \* 2001.11.01 「菊原初子先生を偲んで」『邦楽ジャーナル』11月号
- \* 2001.11.11 解説『菊原光治芸歴35周年記念演奏会』箏組歌「古流四季源氏」、石川勾当「融」「新青柳」、古川瀧齋「面影」、菊岡検校「笹の露」「御山獅子」、峰崎勾当「吾妻獅子」、光崎検校「千代の鶯」「夜々の星」、三つ橋勾当「松竹梅」、山田検校「桜狩」、宮城道雄「菊の栄」
- \* 2001.11.13 「悼菊原初子さん」『毎日新聞』全国版朝刊
- \* 2001.11.21 解説『日本の四季山登松和』COCJ-31690 日本コロムビア 寺島花野「新高砂」、吉沢検校+松阪春栄「春の曲」「夏の曲」「秋の曲」「冬の曲」、光崎検校「五段砧」
- \* 2001.11.29 解説『菊信木恵美・洋子親子ジョイントリサイタル』ドーンセンター、宮城道雄「落葉の踊り」、柳川検校「早船」、古曲「尾上の松」、菊岡検校「御山獅子」、石川勾当「八重衣」
- \* 2001.12.01 「追悼菊原初子先生」『當道』（社団法人当道音楽会機関誌）
- \* 2001.12.21 解説『第二回ビクター邦楽オーディション合格者CDその1、松井美千子』ビクター伝統文化振興財団VZCG-245、菊岡検校「園の秋」、古曲「尾上の松」、石川勾当「八重衣」
- \* 2001.12.21 『その2、佐々木千香能』ビクター伝統文化振興財団 VZCG-246、北島検校「空蝉」、吉沢検校「春の曲」、山木検校「夏の詠」、山田検校「長恨歌曲」連載
- \* 「温故知新」『楽報』（財）都山流尺八楽会報 1月号「七小町」、3月号「新青柳」、5

- 月号「夕顔」7月号「ままの川」9月号「嵯峨の秋」11月号「吾妻獅子」
- \*『邦楽散歩』京都新聞朝刊毎月曜文化欄
    - 04.02「日本の音楽」04.16「コトの神通力」04.23「土と石のロマン」04.30「聖なる響き・鐘や鈴」05.14「国営芸能塾と伎楽」05.21「東大寺に響く国際音楽」05.28「天平の響きを伝える美術品」06.04「ひちりきと塩梅」06.18「デンデン太鼓にヒョウの笛」06.25「音楽にもある左右」07.02「お坊さんは歌手」07.16「不思議なフエの物語」07.23「国風化しなかった琴の物語」07.30「神様は音楽好き」08.06「小督の箏」08.20「琵琶の名器と秘曲」08.27「流行歌にはまった後白河法皇」09.03「琵琶法師と琵琶語り」09.17「翁・三番叟」09.24「平曲と当道」10.01「月と邦楽」10.08「秘すれば花」10.22「中世芸能と尺八」10.29「虚無僧と尺八」11.05「尉と姥」11.19「一つ緒の琴」11.26「法螺吹きと音曲」12.03「越天楽の唱歌」12.17「獅子と邦楽」12.31「当道職屋敷」
  - \*『創明』(創明音楽会会報)7月号「御山獅子」11月号「さむしろ」プロデュース・講演・口述活動
  - \*2001.01.07 解説『永廣孝山を聞く』ニューオオサカホテル/大嶽和久編曲 Vivaldi「春」・Brahms「ハンガリー舞曲第5番」・Doppler「ハンガリー田園幻想曲」山本邦山「峠花」・新実徳光編曲「わらべ唄メドレー」・美空ひばり追憶 中尾都山「木枯」
  - \*2001.02.03「日本の伝統音楽の今」コメント、KBS-TVニュース『うしろの正面』(23:00～23:30 放映)
  - \*2001.02.04『北川芳能復元コンサート』解説 京都都芸術文化会館 田辺禎一＝尚雄「南島情調」中島利之＝雅楽之都「雁が鳴きます」北村芳能「鳥の手紙」「うぐいす」宮城道雄「春の水」「皇后宮御歌～あめつちのやすらかになくさめむ～」「天女舞曲」中能島欣一「千鳥に寄せる三弦協奏曲」金森高山「清姫」町田嘉章＝佳声「春信幻想曲」「雷様」「雪の小人」「おつり落とし」「あわて床屋」久本玄智「銃後の妻」「秋の夕べ」米川親敏＝琴翁「収穫の野」
  - \*2001.02.18 解説司会 香田律子を聞く 祇園一力 八橋検校「京乱」玉岡検校+豊賀検校「口切」沢井忠夫「上弦」古

- 曲+宮城道雄筆「尾上の松」
- \*2001.03.10 大会「日本伝統音楽公開シンポジウム」大学コンソーシアム
- \*2001.04.01～05.05 ラジオ『邦楽のたのしみ～春の詩～』(NHK ラジオ第二放送 毎日曜17:00～17:30、再放送毎土曜12:10～12:40) 恋する春 歌木検校「菜の葉」吉沢検校「山桜」+雅楽「想夫恋」合奏、山田検校「小督」から「楽」 偲ぶ春 三代山勢松韻「花の雲」峰崎勾当「袖香炉」玉岡検校+村住勾当「朝戸出」宮城道雄の春「春の雨」「春の風」「春の夜の風」「春の夜」「春の唄」教科書の春 菊武祥庭「稚児桜」地歌「黒髪」の替え歌「御代の春」名残の春 吉沢検校「春の曲」福田蘭童「春麗」横山勝也「惜春」
- \*2001.04.01 解説 菊井松音追悼演奏会 第2部、伊丹ホール 菊岡検校「夕顔」菊井松音「いけはなの曲(春/花点前付)」「宍道湖幻想」「ゆかりの調べ」峰崎勾当「吾妻獅子」残月「在原勾当」さむしろ、宮城道雄「日蓮」
- \*2001.05.04 解説 素浄瑠璃～情を語る～ 第11回芸術祭典・吉田孝次郎邸 著作活動
- \*2001.05.05 解説 三味線の「味」くらべ 第11回芸術祭典・池坊学園こころホール 著作活動
- \*2001.05.06 解説 小泉玲紫 23 回忌追善演奏会 厚生年金会館ホール 二世上原真佐喜「道成寺黒髪供養」二代小泉玲紫「流れ清らに」幾山検校「磯の春」杵屋正邦「現代三番叟」在原勾当「さむしろ」初代中村双葉「加賀の月」初代小泉玲紫「雨の傾城」唯是震一「松虫」坂本勉「邦楽オペラ花扇」
- \*2001.06.10 解説 邦楽鑑賞会 奈良文化会館 水川寿也「八重奏曲アクシス」江戸信吾(初演)よさこいスケルツォ、鹿の遠音(一尺八寸)小宮瑞代(二五弦)「もうひとつの秋」中村洋一「秋篠」栗林秀明「絵夢」琵琶語り(薩摩)竹取物語、牧野由多可(宮城道雄作曲)「編曲砧」産安(二尺七寸)薩慈(二尺三寸)水野利彦「花織り」宮田耕八郎「花咲山」カデンツァ入り「八重衣」水野利彦「荒城の月・21」
- \*2001.06.16 解説 宮城道雄をしのぶ等の夕べ いずみホール 著作活動
- \*2001.07.14 解説 古典勉強会 エナジー

- ホール 菊原琴治「秋風辞」、古川瀧斎「春重ね」、三橋檢校弥之一「四季の恋」、幾山檢校「萩の露」、菊末勾当「嵯峨の秋」、菊植明琴「菊の朝」、松浦檢校「四季の眺」、若菜、菊岡檢校「新青柳」、竹生島「今小町」、「御山獅子」、「笹の露」、初代杵屋長五郎「出口の柳」、光崎檢校「蕾の梅」、「夕べの雲」、「五段砧」、「夜々の星」
- \* 2001.08.23 コーディネーター「近畿文化大学校シンポジウム」京都府主催、平安会館
- \* 2001.09.08 京極流創立百周年記念演奏会 府民ホールアルティ 鈴木鼓村「静」、巖島詣「搦衣」、「紅梅」、「大原山」他
- \* 2001.09.09 第12回祥門会解説(国立文楽劇場) 光崎檢校「初音」、「七小町」、菊武祥庭「春の景色」、菊岡檢校「長等の春」、幾山檢校「萩の露」、菊末勾当「嵯峨の秋」、松浦檢校「里の暁」、「末の契」、在原勾当「松の壽」
- \* 2001.09.15 解説「林美恵子リサイタル」府民ホールアルティ 勢川某「道中双六」、松阪春栄「楓の花」、三つ橋勾当「松竹梅」、津田青寛「初秋」、光崎檢校「七小町」、金田潮児「喜船幻影」、沢井忠夫「装画」
- \* 2001.09.22 NHK FM放送話「菊原初子追悼特集」『邦楽のひとつとき』11.00～11.30、菊原光治と対談
- \* 2001.09.24 解説『三味線組歌演奏会』府民ホールアルティ 表組「飛弾」、破手組「京鹿子」、「紅」、中組「早舟」、奥組「茶碗」、裏組「青柳」、深草檢校「千代の恵」
- \* 2001.10.28 講演「長谷檢校と九州系地歌」『熊本お城まつり～長谷檢校記念邦楽コンクール～』熊本市市民会館
- \* 2001.11.11 解説「菊原光治芸歴三十五周年記念リサイタル」メルバルク 著作活動
- \* 2001.11.29 解説『菊信木恵美・洋子親子ジョイントリサイタル』ドーンセンター 著作活動
- \* 2001.12.15 解説「菊王楽正地歌演奏会～難波の賑わい～」第一部 ワッハ上方 継橋檢校「難波獅子」、楯城護「初春」、鶴山勾当「正月」、三つ橋勾当「松竹梅」、富岡檢校「梅の雨(町尽くし)」、不詳「浪花十二月」
- \* 2001.12.16 講演「音楽から見た万葉」万葉文化館会館記念(万葉古代学研究所主催)
- \* 2001.12.23 解説「トップコンサート～第15回フィナーレ演奏会～」ドーンセンター 宮城道雄「水の変態」、「花紅葉」、「手事」同手付「尾上の松」、菊岡檢校「御山獅子」、「園の秋」、「笹の露」、吉沢檢校胡弓本曲「千鳥の曲」、前田和男「尺八四重奏曲～変奏曲さくら～」、沢井忠夫「そして秋」、峰崎勾当「吾妻獅子」、中村双葉「雲井調子を主題とする合奏曲」、松浦檢校「深夜の月」、在原勾当「さむしろ」、幾山栄福「萩の露」、大嶽和久編曲「尺八・箏で奏するひばり演歌」、石川勾当「融」、「新青柳」、光崎檢校「七小町」、三木稔「秋の曲」、杵屋正邦「言問」調査・取材活動(略) 対外活動(略)
- 長廣 比登志  
著作活動
- \* 2001.03.23 曲目解説『現代「箏の音楽の流れ」その6 プログラム』監修:長廣比登志、主宰:菊地悌子・白根きぬ子、発行:『現代「箏の音楽の流れ』事務局、すみだトリフォニー小ホール、長澤勝俊 箏四重奏曲、宮下秀冽 十七絃・尺八二重奏曲、小山清茂 夏鳥より、安達元彦 邦楽器のためのトッカータ、伊藤隆太 六重奏曲
- \* 2001.06.29 曲目解説『第4回国立劇場作曲コンクールプログラム』主催:文化庁、日本芸術文化振興会(国立劇場) 諸井誠 竹籟五章、浦田健次郎 碧潭第5番、胡 銀岳 浜の秋の夜の月を
- \* 2001.09.20 曲目解説『現代「箏の音楽の流れ」その7 プログラム』監修:長廣比登志、主宰:菊地悌子・白根きぬ子、発行:『現代「箏の音楽の流れ』事務局、すみだトリフォニー小ホール、杵屋正邦 十七絃と小鼓のための二重奏曲、入野義朗 尺八と箏の協奏的二重奏、清水脩 箏のための小協奏曲 心象、唯是震一 十七絃独奏のための六つの前奏曲、牧野由多可 笛・蛙よ
- \* 2001.11.28 曲目解説 京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター平成13年度第1回公開講座「現代邦楽への招待」京都芸術センター、宮城道雄 手事 から 輪舌、諸井誠 竹籟五章 から 芬陀・明暗、廣瀬量平 みだれによる変容、廣瀬量平 魂ふり、「現代邦楽の成立と発展～箏と尺八の作品を中心に～」箏・尺

- 八を中心とした近・現代の音楽年表」  
企画・演出・口述活動
- \* 2001.03.23 『現代「箏の音楽の流れ」その6』 すみだトリフォニー小ホール 監修・演出
  - \* 2001.11.28 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター平成13年度第1回公開講座「現代邦楽への招待」京都芸術センター企画・演出・講演・舞台設計調査・取材活動
  - \* 2001.04.06 田邊秀雄氏所蔵伝統音楽および文献資料調査・取材、同氏宅(東京、目白)
  - \* 2001.08.22 所長対談コーディネート(京都、都ホテル) 対外活動
  - \* 通年 日本工学院八王子専門学校講師「日本芸能史」
  - \* 芸術文化振興基金運営委員専門委員
  - ・ 2001.02.13 芸術文化振興基金運営委員会第2回伝統芸能専門委員会、芸術文化振興基金(国立劇場)
  - ・ 2001.02.14 芸術文化振興基金運営委員会第3回音楽専門委員会、芸術文化振興基金(国立劇場)
  - ・ 2001.03.12 芸術文化振興基金運営委員会第3回音楽専門委員会(国立劇場)
  - ・ 2001.03.13 芸術文化振興基金運営委員会第3回伝統芸能専門委員会(国立劇場)
  - ・ 2001.03.26 芸術文化振興基金運営委員会舞台芸術等部会(国立劇場)
  - \* 文化庁舞台芸術創作奨励 国立劇場作曲コンクール審査員
  - ・ 2001.06.29 文化庁舞台芸術創作奨励 第4回国立劇場作曲コンクール本選会
  - \* 平成13年度芸術選奨音楽部門選考委員
  - \* 所属学会: 芸能史研究会、民族芸術学会

田井 竜一  
著作活動

- \* 2001.03 論文「第7章 囃子」, 上野市教育委員会編『三重県指定無形民俗文化財上野天神祭総合調査報告書(上野天神祭伝承保存事業)』三重、上野市教育委員会、12センチCD3枚組別冊付、pp. 271-306(増田 雄との共同執筆、および別冊CDの増田 雄との共同構成ならびに解説書の共同執筆)
- \* 2001 研究ノート「音楽(音文化)研究の課題と展望 行政調査と音楽(音文化)研究」, 『中部高等学術研究所共同

- 研究会 諸民族の音文化(音楽)研究の課題と展望」, Chubu Institute for Advanced Studies、Studies Forum Series 9、愛知、中部高等学術研究所、pp. 46-55
- \* 2001.03.30 調査報告「第2章 水口曳山囃子の諸相」, 滋賀県水口町立歴史民俗資料館編『水口曳山囃子 曳山(だし)を囃し・人を囃し・町を囃す(伝統文化伝承総合支援事業)』滋賀、滋賀県水口町教育委員会、12センチCD2枚付CDブック、pp. 8-34(およびCDの録音・構成)
- \* 2001.03.31 調査報告「第3章 供養田植の囃し・太鼓田の囃し」, 「第5章 囃し田の囃し」, 「第8章 囃し田の史料」第5節 大山供養田植関連文献目録【囃子関連文献】「付編1 CD収録苗取り歌・田植歌詞章」, 「付編2 囃し田の囃し CD収録内容一覧」, 東城町教育委員会編『国選択民俗芸能・広島県無形民俗文化財 大山供養田植 大山供養田植調査報告書』広島、広島県東城町教育委員会、12センチCD1枚付、pp. 28-56、102-111、226-230、231-249、250-251(および付録CDの録音・構成)
- \* 2001.08.08 インタビュー記事「人物素描2001: 血肉の通う囃子の音を探り続ける」, 『京都新聞』2001年8月8日朝刊。口述活動
- \* 2001.02.24 研究発表「音楽(音文化)研究の課題と展望: 行政調査と音楽(音文化)研究」, 中部高等学術研究所共同研究会『諸民族の音文化(音楽)研究の課題と展望』, ホテルプラザ勝川、コンファレンスルーム
- \* 2001.10.20 解説「第1回堺芸術芸能フェスティバル 民族芸能公演: 大韓民国、サモア、パラグアイ」, 堺芸術芸能フェスティバル実行委員会主催、ウェスティホール 調査・取材活動
- \* 継続中 水口曳山囃子調査、京都祇園祭り鶏鉦囃子調査
- \* 2001.02.10 国立民族学博物館共同研究会出席
- \* 2001.02.15 東城町大山供養田植調査報告書編集会議出席
- \* 2001.02.21 西暦2000年世界民族芸能祭 演者招聘検討会議出席(堺市)
- \* 2001.02.23 ~ 24 中部高等学術研究所共同研究会出席
- \* 2001.03.08 西暦2000年世界民族芸能祭 演者招聘検討会議出席(堺市)

- \* 2001.03.15 日本ポピュラー音楽学会研究活動委員会出席 (大東文化大学)
- \* 2001.03.16 東城町大山供養田植調査報告書編集会議出席
- \* 2001.03.28 ~ 29 東洋音楽学会改革検討委員会出席 (阪南大学)
- \* 2001.06.07 京都祇園祭り菊水鉾囃子調査
- \* 2001.06.22 東城町大山供養田植調査反省会出席
- \* 2001.07.01 ~ 京都祇園祭り菊水鉾囃子調査
- \* 2001.09.01 日本ポピュラー音楽学会研究活動委員会出席 (大東文化大学)
- \* 2001.09.16 東洋音楽学会改革検討委員会出席 (東京芸術大学)
- \* 2001.10.07 日韓交流民俗芸能フェスタinびわ湖見学 (滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール) 救免地踊り見学 (京都八瀬)
- \* 2001.10.17 ~ 20 第1回堺芸術芸能フェスティバル開幕式典出席 (じばしん南大阪イベントホール)
- \* 2001.11.11 第4回全国曳山囃子大会出席 (滋賀県立水口文化芸術会館)
- \* 2001.11.23 ~ 25 (社)東洋音楽学会第52回大会参加 (沖縄県立芸術大学)
- \* 2001.12.01 ~ 02 日本ポピュラー音楽学会第13回大会参加、同研究活動委員会出席 (関西大学)
- \* 2001.12.24 堺国際芸術芸能フェスティバル実行委員会識者懇話会委員会出席 対外活動
- \* くらしき作陽大学音楽学部・作陽短期大学部音楽科非常勤講師
- \* 2001.04.01 ~ 香川大学教育学部非常勤講師
- \* (社)東洋音楽学会情報委員会・改革検討委員会委員
- \* 2001.04.01 ~ 日本ポピュラー音楽学会研究活動委員会委員
- \* Member of the Editorial Board, *Perfect Beat: The Pacific Journal of Research into Contemporary Music and Popular Culture*
- \* ~ 2001.03.31 国立民族学博物館共同研究員
- \* 中部高等学術研究所共同研究員
- \* ~ 2001.03.31 西暦2000年世界民族芸能祭演者招聘検討会議委員 (大阪府・堺市)
- \* 2001.04.01 ~ 堺国際芸術芸能フェスティバル実行委員会識者懇話会委員 (堺市)
- \* ~ 2001.03.31 上野市天神祭記録作成委員会委員 (三重県上野市)
- \* ~ 2001.03.31 「大山供養田植調査報告書」作成にかかる調査員 (広島県東城町)
- \* 「水口曳山囃子保存活用事業」に係る調査委員 (滋賀県水口町)
- \* 所属学会: (社)東洋音楽学会、日本オセアニア学会、日本音楽学会、日本ポピュラー音楽学会、日本民族学会、民族芸術学会、International Council for Traditional Music、Society for Ethnomusicology
- 高橋 美都  
著述活動
- \* 2001.05.10 東洋音楽学会 会報第52号 定例研究会報告 シンポジウム「楽器史への試み—春日大社の和琴をめぐる」(高桑いづみ代表執筆)
- \* 2001.11.16 天王寺楽所雅亮会 第35回雅楽公演会 プログラム「天王寺舞楽の特質」
- \* 2001.12.20 講演記録「舞楽について」住吉大社社務所発行『すみのえ』通巻243 平成14年新年号 pp.42-62
- 口述活動
- \* 研究発表
- 2001.02.10 東洋音楽学会第436回定例研究会 シンポジウム「楽器史への試み—春日大社の和琴を中心に—」(パネリスト秋田真吾・高桑いづみ・野川美穂子と共同)
- 2001.09.23 平安京文化研究会第59回例会 研究発表「儀礼の文脈の中の舞楽」
- \* 講演
- 2001.02.24 第72回住吉セミナー講師 浪花の古典芸能講師「舞楽をめぐる」住吉大社
- 2001.06.30 第28回雅亮会セミナー講師「舞楽とは」北御堂津村別院
- \* 解説
- 2001.04.05 田中之雄 琵琶コンサート 静岡県森町 大洞院 調査・取材活動
- \* 楽器調査
- 2001.01.11 東京芸術大学芸術資料館蔵和琴調査
- 2001.01.24 正倉院事務所写真資料調査
- 2001.04.04 歴史民俗博物館琵琶調査
- 2001.06.04 鼓胴調査 (益田鈍翁旧蔵)
- 2001.06.13 ~ 15 徳川博物館琉球楽器調査
- 2001.07.18 伊勢神宮鷲尾琴調査

- ・ 2001.08.01 彦根城博物館琵琶調査
- ・ 2001.08.31 ~ 09.01 北九州琵琶調査(求菩提山ほか)
- ・ 2001.09.07 熱田神宮鳶尾琴調査
- ・ 2001.09.21 金比羅神宮和琴調査
- ・ 2001.09.25 ~ 26 佐賀県立博物館・鍋島徴古館楽器調査
- ・ 2001.12.17 ~ 19 三の丸尚蔵館楽器調査
- \* 舞楽調査
- ・ 2001.04.07 静岡県森町雨宮神社舞楽調査
- ・ 2001.04.22 天王寺聖霊会舞楽
- ・ 2001.04.29 春日若宮神社仮殿遷座祭御慶舞楽
- ・ 2001.08.08 天王寺かがりの舞楽
- \* 研修
- ・ 2001.01.10 ~ 12 東京文化財研究所にて楽器シンポジウム打ち合わせ・資料作成
- ・ 2001.03.13 ~ 17 メディア教育開発センター研修 ビデオ教材制作講座
- ・ 2001.04.06 東京文化財研究所にて上方落語実演記録
- ・ 2001.05.27 国際音楽資料情報教会(IAML)日本支部2001年総会(東京 国際文化会館)
- ・ 2001.07.07 ~ 15 IAML(国際音楽資料情報協会)年次大会(フランス、ペリグー)
- ・ 2001.07.31 デジタルアーカイブセンター「デジタルライブラリ研究会(仮称)準備会」
- ・ 2001.08.28 デジタルアーカイブセンター一周年記念シンポジウム
- ・ 2001.10.07 日韓交流民族芸能フェスタ in びわ湖
- ・ 2001.10.18 デジタルシティ京都国際シンポジウム
- ・ 2001.11.13 ~ 15 東京文化財研究所第25回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「日本の楽器-新しい楽器学へ向けて」
- ・ 2001.11.23 ~ 25 東洋音楽学会第52回大会(研究発表B司会)
- 対外活動
- \* 楽劇学会第9回大会実行委員(大会実施2001.06.10)
- \* 廣瀬量平代表 科学研究費基盤研究 C 「日本伝統音楽所用楽器のデジタルアーカイブ化研究」研究分担者
- \* 高桑いづみ代表 科学研究費基盤研究 C 「古楽器の形態と音色に関する総合研究」研究分担者
- \* メディア教育開発センター「学術・教育

- 素材のデジタルコンテンツ化と高等教育への活用」研究協力者
- \* 上参郷祐康代表 科学研究費基盤研究 B 「日本伝統音楽文献データベース作成」研究協力者(打合せ出席2001.02.18/09.30)
  - \* 所属学会: 東洋音楽学会、日本歌謡学会、中世歌謡研究会、芸能史研究会、楽劇学会、民族芸術学会、民俗芸能学会、民俗音楽学会、国際音楽資料情報協会

スティーヴン・G・ネルソン  
著作活動

- \* 論文
- ・ 2001.10.31 「藤原孝道草『式法則用意条々』における講式の音楽構成法」福島和夫編『中世音楽史論叢』pp. 215-277 大阪:和泉書院
- ・ 2001.11 “Depiction of *gaku*: Remarks on the value of music iconography in historical research on the traditional music of Japan”(「描かれた楽——日本伝統音楽の歴史的研究における音楽図像学の有用性について——」) *Preprints of the 25th International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property—Japanese Musical Instruments: Toward a New Organology—*, pp. 95-115. Tokyo: National Research Institute for Cultural Properties.
- \* CDの英文解説
- ・ 2001.08 *The Art of the Koto* Volume 2: From Yatsushashi to Miyagi (『箏の芸術』第2巻: 八橋検校から宮城道雄まで) 演奏: 吉村七重、深海さとみ、三橋貴風 曲目: 八橋検校《四季曲》、伝八橋検校《八段》、松阪春栄《楓の花》、作詞作曲者未詳: 箏手付け宮城道雄《尾上の松》、宮城道雄《瀬音》、宮城道雄《春の海》 Arizona, USA: Celestial Harmonies, 13187-2 24 pp.
- ・ 2001.10 *Buddha: Radiant Awakening* (『仏陀-光を放つ悟り』)の「日本の真言・天台声明」部分 演奏: 迦陵頻伽聲明研究会(真言宗豊山派)・七聲会(天台声明) 曲目: 《吹螺三声》、《四智梵語》(真言)、《云何唄》(真言)、《散華》(真言)、《対揚》(天台)、《百字偈》(真言)、《百八讃》(天台) Arizona, USA: Celestial Harmonies, 114215-2 8 pp.
- \* 曲目解説
- ・ 2001.02.04 「ざこば・楽正・六輔の三ツ重ね」プログラム 愛知県丹羽郡 扶桑文化会館 曲目: 《御山獅子》《花の旅》

- \* 2001.10.13 「第11回 亀山香能箏曲演奏会」プログラム 東京 芝公園 abc 会館ホール 曲目：秘曲《乙の組》、松本一太作詞・中能島欣一作曲《赤壁賦》、山田校作曲《小督曲》
- \* 英訳
- 2001.01.31 *Contemporary Japanese Music 5: KANNO Yoshihiro, "Saigyoo—The Path of Light" / 『現代の日本音楽 第5集 菅野由弘《西行——光の道》* 日本芸術文化振興会、国立劇場調査育成部芸能踏査室編 東京：春秋社
  - 2001.03.31 *Contemporary Japanese Music 6: KIKKAWA Kazuo, "Rongi Grand Vegetarian Festival" / 『現代の日本音楽 第6集 吉川和夫《論義ビヂテリアン大祭》* 日本芸術文化振興会、国立劇場調査育成部芸能踏査室編 東京：春秋社
  - 2001.11.30 *Contemporary Japanese Music 7: The Work of Mizuno Shūkō / 『現代の日本音楽 第7集 水野修孝作品』* 日本芸術文化振興会、国立劇場調査育成部芸能踏査室編 東京：春秋社
- \* その他
- 2001.09.10 「コメント」(第439回東洋音楽学会定例研究会、第68回日本音楽学会関東支部・東洋音楽学会合同例会、2001年5月12日、シンポジウム「音楽図像学の可能性」) 『東洋音楽学会会報』53: 6-7
  - 2001.04.20 座談会記録 「文化の壁を越えて——国際人が語る日本音楽の魅力」現代邦楽研究所編 『日本音楽のちから——次時代に伝えたい古くて新しい音の世界』 / *The Future Dynamism of Japanese Music*, pp. 150-61 東京：音楽之友社(現代邦楽研究所主催で行われた公開講座の記録)
- 口述活動
- \* 研究発表
- 2001.01.18 “Issues in the interpretation of notation for East Asian lutes (琵琶 *pipa* / *biwa*) as preserved in scores of the eighth to twelfth centuries”(「8世紀から12世紀にかけて成立した琵琶の古楽譜の解読における諸問題」) Session: “Interpretation of Tang Musical Scores in Japan,” 2001 PNC Annual Conference and Joint Meetings, City University of Hong Kong
  - 2001.03.24 “Improvisatory vocal realization of written texts in early medieval Japan: *Kōshiki* lecture-ritual performance and narration of the *Tale of the Heike*” (「中世前期の日本における固定テキストの読誦法とその即興性——講式と平家語り——」) Session 140: “The Politics of Voice: Orality and the Invention of Tradition in Premodern Japanese Performing Arts,” 53rd Annual Meeting of the Association for Asian Studies, Chicago, Illinois
  - 2001.11.14 “Depiction of *gaku*: Remarks on the value of music iconography in historical research on the traditional music of Japan” (「描かれた楽——日本伝統音楽の歴史的研究における音楽図像学の有用性について——」) 第25回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「日本の楽器 - 新しい楽器学へ向けて -」(Japanese Musical Instruments: Toward a New Organology) セッション II. 図像学から見た楽器 (Iconographical Study of Musical Instruments) 東京文化財研究所
  - 2001.11.23 「初期琵琶譜のリズム解釈 - 右側付点の意味を問う -」第4回中日音楽比較研究国際学術会議 沖縄県立芸術大学
- \* 研究報告
- 2001.07.28 「音楽図像学プロジェクト基調報告」京都市立芸術大学日本伝統音楽センター研究プロジェクト「日本伝統音楽を対象とする音楽図像学の総合研究」「楽器の復元に関する総合研究」第1回研究集会 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
- \* 講演
- 2001.02.03 現代邦楽研究所第6期公開講座「古典研究 段ものの魅力 第2回」演奏：石垣清美、西潟昭子 東京 現代邦楽研究所 (TAスタジオ)
  - 2001.02.19 特別講義“GAGAKU: music at court, temple and shrine” 京都 スタンフォード日本センター
  - 2001.07.15 「歴史と説話 - 『経正都落』と『青山』 -」弘前NHK文化センター平家琵琶鑑賞教室 演奏：新井泰子 弘前市西茂森町 盛雲院本堂
  - 2001.10.21 「琵琶の秘曲 - 『大臣流罪』と『祇園精舎』から -」弘前NHK文化センター平家琵琶鑑賞教室 演奏：新井泰子 弘前市西茂森町 盛雲院本堂
  - 2001.10.31 「平家琵琶の演奏と解説 - 『経正都落』と『青山』 -」OCAT芸術文化サロン「日本の音・アジアの音」演奏：



- 新井泰子 大阪OCATホール
- \* 解説
- ・ 2001.11.10 山田流箏曲千種会演奏会 仙台 仙台市戦災復興記念館 曲目:《四季の友》、《万歳》、《千鳥曲》、《京のわらべうた》、《江の島》、《岡安帖》、《観音さま》、《中国地方の子守歌》、《根曳の松》、平家がたり《敦盛》、《新ざらし》
  - ・ 2001.12.15 山田流箏曲奏心会 東京 紀尾井小ホール 曲目:《千鳥曲》、《千鳥曲を主題とせる三絃曲》、《椿尽し》、《松の寿》、《八段恋慕》、《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》第1楽章
- \* 放送出演
- ・ 2001.01.20 Weekend Square, NHK International
  - ・ 2001.11.02 Power Spot, 89.7 FM, Sydney, Australia
  - ・ 2001.11.05 Asian Fuse Box, 2SER FM, 107.3 FM, Sydney, Australia
- \* 演奏
- ・ 2001.02.04 「ざこば・楽正・米朝の三ツ重ね」《御山獅子》の箏を担当(三味線、菊原光治・菊央雄司) 愛知県丹羽郡 扶桑文化会館
  - ・ 2001.09.10 箏・歌《六段》、《四季の友》、《千鳥の曲》 Wollongong Conservatorium of Music, N.S.W., Australia
  - ・ 2001.09.14 箏・歌《六段》、《四季の友》、《千鳥の曲》 Illawarra Grammar School, N.S.W., Australia
- 調査・取材活動
- \* 芸能の調査見学
- ・ 2001.04.20 宮内庁式部職楽部春期雅楽演奏会
  - ・ 2001.04.22 大阪四天王寺聖霊会
- \* 史料調査
- ・ 2001.04.20 神奈川県立金沢文庫(『式法則用意条々』『西方楽』)
  - ・ 2001.11.02 特別展示会「史書の世界」 宮内庁書陵部庁舎展示室
- \* 楽器・図像資料調査
- ・ 2001.03.21 スミスソニアン協会 Freer and Sackler Galleries (ワシントンDC) 七弦琴(宋・明代のもの、鉄製・青銅製のものも含み合計6面) 当麻曼陀羅、その他の楽器・図像資料 予備調査
  - ・ 2001.05.19 春日大社楽器展覧・宝物殿セミナー 対外活動
- \* 通年 上野学園日本音楽資料室共同研究

- 員
- \* 通年 宗教法人寶玉院附属日本伝統音楽研究所非常勤講師「日本音楽史」
  - \* 日文研(国際日本文化研究センター)共同研究会・ルービン班「生きている劇としての能: 謡曲の多角的研究」共同研究員
  - ・ 第4回 2001.01.22 ~ 23 討論のテーマ: 《絃上》、《経正》、能における管絃、《藤戸》、《鞍馬天狗》、その比較検討
  - ・ 第5回 2001.03.26 ~ 27 討論のテーマ: 《江口》、《恋重荷》、その比較検討、《弱法師》、《呉服》、《錦木》、総括討論など(都合により欠席)
  - \* 2001.04 ~ 廣瀬量平代表 科学研究費基盤研究C「日本伝統音楽所用楽器のデジタルアーカイブ化研究」研究分担者
  - \* 2001.01.15 ~ 20 PNC (Pacific Neighborhood Consortium) Annual Conference and Joint Meetings (香港)に招聘 研究発表を行なう
  - \* 2001.03.22 ~ 25 Association for Asian Studies 2001年次大会(米国 シカゴ)に出席 研究発表を行なう
  - \* 2001.07.07 第441回東洋音楽学会定例研究会 司会 東京 上野学園日本音楽資料室
  - \* 2001.11.13 ~ 15 第25回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「日本の楽器 - 新しい楽器学へ向けて - (東京文化財研究所)に招聘 研究発表を行なう
  - \* 2001.11.22 ~ 25 第4回中日音楽比較研究国際学術会議(沖縄県立芸術大学)に招聘 研究発表を行なう
  - \* 所属学会: 東洋音楽学会、日本歌謡学会、日本音楽学会、佛教文学会、中世文学会、International Council for Traditional Music、Musicological Society of Australia、Association for Asian Studies、International Association of Music Libraries, Archives and Documentation Centres (IAML)、Society for Ethnomusicology、Society for Asian Music

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター  
概要 2001

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターは、日本の社会に根ざす伝統文化を、音楽・芸能の面から総合的に研究することを目指します。

古くから日本の地に起こり、外からの要素の受容を絶えず繰り返しつつも、独自の様相を今日に呈している日本の伝統的な音楽・芸能は、日本語と同じように、日本の、そして世界の貴重な宝です。これらは、維持継承させるべきものであると共に、新しい文化創造のための源泉として発展されるべきものである、との認識をもちます。

センターは日本の伝統的な音楽・芸能と、その根底にある文化の構造を解明し、その成果を公表し、社会に貢献するように努めます。そのために国内外の研究者・研究機関・演奏家と提携し、成果や情報を共有・交流する拠点機能の役割を果たします。

京都は1200年以上にわたって、日本における文化創造の核であり続けています。このセンターは、伝統的な音楽・芸能を中心とする研究分野で、重要な役割と使命を担い、その核になることを目指します。

## センターの活動

資料の収集・整理・保存

文献資料（図書、逐次刊行物、古文書、マイクロフィルムなどの複写・非印刷資料を含む）

音響映像資料

楽器資料

絵画資料

データベースなどの電子資料

日本の伝統的な音楽・芸能の個別研究

専任研究員による個人研究

特別研究員による特定のテーマの個人研究

研究者に、その専門領域に即したテーマで委託する研究

日本の伝統的な音楽・芸能の共同研究  
国内外の多くの研究者・演奏家の参加・協力を得て、学際的・国際的な視野で、センターが行う共同研究センターが外部と共同して行う調査研究  
活動成果の社会への提供

公開講座・セミナー等の開催

紀要・所報・資料集などの出版

オンラインによる公開

## 研究の対象

伝統的芸術音楽の歴史・現状・未来をみずえる

明治までに成立した伝統音楽の展開と伝承

古代  
祭祀歌謡と芸能（楽器等の考古学的遺物を含む）上代・中古  
仏教音楽（声明等）

宮廷の儀礼・宴遊音楽（雅楽等）

中世  
仏教芸能（琵琶、雑芸、尺八等）

武家社会の芸能（能・狂言等）

流行歌謡（今様、中世小歌等）

近世

外来音楽（切支丹音楽、琴楽、明清楽）

劇場音楽（義太夫節・常磐津節等の浄瑠璃、長唄、歌舞伎囃子等）

非劇場音楽（地歌箏曲、三味線音楽、琵琶楽、尺八等）

流行歌謡（小唄、端唄等）

近代社会での伝統音楽の展開をみずえる  
伝統音楽の発展とその可能性に関する事象の研究

伝統音楽の享受と教育に関連する事象の研究

広い視野で生活の音楽をみずえる

民間伝承と日本関連諸地域及び先住民族の音楽・芸能の研究

生活における音楽・芸能（わらべうた・民謡、祭祀音楽等の民俗芸能）の研究

## 専任研究員

（専門領域・現在の研究テーマ）

所長 廣瀬量平（作曲・現代邦楽論）

「縄文文化に由来する石笛とそれによってもたらされる音楽について」

「日本伝統音楽を基盤とした今日の音楽作品の研究」

教授 久保田敏子（日本音楽史学）

「当道職屋敷廃止後の三曲界研究」

「地歌・箏曲の作品研究」

教授 長廣比登志（現代邦楽論）

「現代邦楽の歴史的考察」

「現代邦楽放送記録目録の作成」

助教授 田井竜一（民族音楽学・日本芸能論）

「ダシの囃子の比較研究」

「囃し田の研究」

助教授 高橋美都（芸能史・日本音楽情報論）

「舞楽の比較研究」

「日本伝統楽師のデータベース作成」  
助教授 スティーヴン・G・ネルソン(日本音楽史学)  
「『順次往生講式』の総合研究」  
「初期の講式の音楽構成法について」

#### 特別研究員

上杉紅童(高崎芸術短期大学客員教授)「日本古代の石笛および土笛の音響的・楽器学的研究」  
岡田万里子(京都造形芸術大学非常勤講師)「江戸時代後期の上方面における歌舞伎音楽の研究」  
尾関義江(奈良教育大学非常勤講師)「学校における邦楽教育方法論の研究」  
中原香苗(京都精華大学非常勤講師)「中世楽書と音楽説話に関する研究」  
和田一久(箏曲京極流三世宗家)「『六国史』に現れた和琴」  
京極流百年史編纂  
委託研究員  
井澤壽治(上方活性化研究会会長)「上方座敷歌の研究 その背景と暗喩について」  
山田智恵子(京都市立芸術大学非常勤講師)「義太夫節の音楽学的研究 『語り』における規範と変形可能性」

#### プロジェクト研究・共同研究

プロジェクト研究  
「日本伝統音楽を対象とする音楽図像学の総合研究」  
研究代表者：スティーヴン・G・ネルソン  
「楽器の復元に関する総合研究」  
研究代表者：高橋美都  
顧問：蒲生郷昭、ティルマン・ゼーバス、福島和夫  
プロジェクト研究員：赤石敦子、秋田真吾、泉 武夫、入江宣子、遠藤 徹、大槻晴彦、岡田万里子、小野 真、加須屋 誠、勝村仁子、久保田敏子、坂本麻美子、嶋 和彦、志村 哲、関根敏子、田井竜一、高桑いづみ、竹内有一、田島みどり、谷本一之、中溝一恵、野川美穂子、長谷川由美子、樋口昭、樋口真規子、富金原 靖、福原敏男、モニカ・ペーテ、宮崎まゆみ、山下裕二、山寺三知、由比邦子  
共同研究  
「邦楽歌詞研究I 地歌・箏曲」  
研究代表者：久保田敏子  
共同研究員：井口はる菜、小野恭靖、佐々木 聖佳、鈴木由喜子、永池健二、スティーヴン・G・ネルソン、野川美穂子、真鍋昌弘、山根陸宏  
「ダシの祭り」と囃子の諸相」  
研究代表者：田井竜一  
共同研究員：青盛 透、入江宣子、岩井正浩、

植木行宣、垣東敏博、樋口 昭、福原敏男、増田 雄、米田 実  
「琴・箏の系譜 楽器、文献と奏法」  
研究代表者：スティーヴン・G・ネルソン  
共同研究員：青木洋志、磯 水絵、遠藤 徹、久保田敏子、告井幸男、和田一久

#### 事務局

事務長：今井 洋 担当係長：野村征理代  
係員：才田典子

#### 司書・研究補助員

司書：井口はる菜  
研究補助員：伊藤志野、今井敏行、水落 学

#### 施設

新研究棟(階構成・内容)  
6階 センター所長室、事務室、センター会議室、資料室、資料管理室、個人研究室  
7階 合同研究室(2)、楽器庫、貴重資料庫  
8階 個人研究室(5)、研究員室(2)、視聴覚編集室、研修室(2)  
(センター総面積 約1,500m<sup>2</sup>)

#### 設立の経緯

平成3年6月 世界文化自由都市会議推進検討委員会において、廣瀬量平委員が日本伝統音楽の研究施設の必要性を提言する。  
平成5年3月 新京都市基本計画「大学・学術研究機関の充実」の「市立芸術大学の振興」の項で、「邦楽部門の新設についても研究する」と言及  
平成8年6月 京都市芸術文化振興計画「教育・研究機関の充実」で、日本の伝統音楽や芸能を研究・教育するための体制を整えることが提唱される  
平成8年10月 京都市が伝統音楽調査会(会長：廣瀬量平名誉教授)に、伝統音楽研究部門の調査を委託する  
平成8年12月 京都市の「もっと元気に・京都アクションプラン」の「文化が元気」の項目に、伝統音楽研究部門の設置が位置づけられる  
平成9年4月 実施設計費及び地質調査経費予算措置  
平成10年4月 施設建設費 予算措置  
平成10年10月 施設建設着工(工期17ヶ月)  
平成11年9月 日本伝統音楽研究センター設立準備室を設置する(室長：廣瀬量平名誉教授)  
平成12年2月 新研究棟竣工  
平成12年4月 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター開設  
平成12年12月 京都市立芸術大学新研究棟完成披露式挙行

Research Centre for Japanese Traditional Music  
Kyoto City University of Arts  
2001

The Research Centre for Japanese Traditional Music was founded at the Kyoto City University of Arts on April 1, 2000, with the aim of undertaking comprehensive research on traditional music and performing arts within the society and culture of Japan.

In the more than one hundred years since the Meiji Restoration of 1868, Japan has followed a path of modernization and Westernization, which has become more pronounced in the fifty something years since the end of World War II. We have reached a time ripe for the reconsideration of Japan's traditional culture, and the development of new approaches to it. The founding of the Research Centre for Japanese Traditional Music at the Kyoto City University of Arts is of particular significance in view of the fact that Kyoto has long been the living centre of Japan's traditional culture.

Kyoto is rich in physical evidence of its traditional culture, what we may term a 'visual' heritage; with the establishment of this new body, however, the city authorities have demonstrated an attitude of respect towards its 'aural' heritage. As a new 'centre' for research on Japan's traditional music, the Research Centre aims to make a broad and significant contribution to the field of Japanese music, by means of sharing and exchanging information and the results of research with researchers, other research establishments, and performers, not only within Japan but throughout the world.

The Research Centre for Japanese Traditional Music thus hopes to link the past with the present through a unique range of activities in research and creation, within the wider context of Japan's traditional culture.

#### Activities of the Research Centre

A. Collecting, ordering, and preserving research materials of relevance to the study of Japan's traditional music and performing arts:

- (1) Documentary materials (books, periodicals,

old documentary sources, copied and non-printed materials including microfilm, etc.)

- (2) Audio-visual materials
- (3) Instruments and related materials
- (4) Pictorial materials
- (5) Materials in electronic form, such as existing databases and the like

B. Individual research on Japan's traditional music and performing arts:

- (1) Research by individual members of the full-time staff
- (2) Research on particular themes by scholars employed as part-time research fellows
- (3) Research commissioned from scholars outside of the Research Centre on their fields of speciality

C. Team research on Japan's traditional music and performing arts:

- (1) Team research undertaken from an interdisciplinary and international perspective by research teams based at the Research Centre, formed for that purpose with the cooperation and participation of researchers and performers from both Japan and overseas
- (2) Surveys in collaboration with other bodies and/or individuals

D. Bringing the results of research to a wider audience through the following activities:

- (1) Public events including lecture series, seminars, workshops, and lecture-demonstrations
- (2) Publications including a regular newsletter, an annual bulletin, and collections of research materials

#### Fields of Research

The research fields of the Research Centre encompass the past, present and future of Japan's traditional music.

- (1) The development and transmission of music prior to the Meiji Restoration of 1868

#### Prehistoric times

Religious song and performing arts (including archaeological study of surviving ex-

amples of instruments, etc.)

#### **Ancient times**

Buddhist music (*shoomyoo*, etc.)

Ceremonial and entertainment music of the court (*gagaku*, etc.)

#### **Medieval times**

Buddhist performing arts (*biwa*-accompanied narrative, *zoogei*, *shakuhachi*, etc.)

Performing arts of the warrior class (*noo*, *kyoogen*, etc.)

Popular song (*imayoo*, medieval *kouta*, etc.)

#### **Pre-modern times**

Music from foreign sources (so-called 'Christian' music, Chinese *qin* music in Japan, *minshingaku*)

Theatrical music (*gidayuu-bushi*, other types of *jooruri* including *tokiwazu-bushi*, etc., *nagauta*, *hayashi* music in *kabuki*, etc.)

Non-theatrical music (*jiuta sookyoku*, other *shamisen* genres, *biwa*-accompanied vocal genres, *shakuhachi*, etc.)

Popular song (*kouta*, *hauta*, etc.)

#### (2) Developments in traditional music since the Meiji Restoration

The development of traditional music and its possibilities, including composition

The reception of traditional music and the place of traditional music in education

#### (3) Music in daily life, in the broadest terms

Folk transmission and the music and performing arts of areas related to Japan and of its indigenous minorities

Music and the performing arts in daily life (children's song and folk song; folk performing arts including festival music)

#### **Full-time Research Staff**

(Position, research fields and current research topics)

HIROSE Ryohei (Director; Composition, Contemporary music for traditional instruments) Stone flutes of Jomon culture and music that can be played on them; Japan's traditional music as a source for creation

KUBOTA Satoko (Professor; Historiography of Japanese music) Research on the *sankyoku* music world after the abolition of the Toodoo Shokuyashiki; Research on works of the *jiuta*

and *sookyoku* repertoires

NAGAIRO Hitoshi (Professor; Contemporary music for traditional instruments) Historical study of the genre of contemporary works for traditional instruments; Documentation and cataloguing of broadcasts of contemporary works for traditional instruments

STEVEN G. NELSON (Associate professor; Historiography of Japanese music) Comprehensive research on the *Junshi oojoo kooshiki*; Research on the methods of musical construction employed in early performances of *kooshiki* texts

TAI Ryuuichi (Associate professor; Ethnomusicology, Japanese performing arts) Comparative research on the *hayashi* music of *dashi* festival floats; Research on the *hayashida* folk music genre of the Chuugoku District

TAKAHASHI Mito (Associate Professor; History of the performing arts, Japanese music and information technology) Comparative research on central and peripheral *bugaku* dance traditions; Construction of a database on Japan's traditional music instruments

#### **Research Fellows**

NAKAHARA Kanae (Part-time lecturer, Kyoto Seika University): Research on music treatises and music tales of the medieval period

OKADA Mariko (Part-time lecturer, Kyoto University of Art and Design): Research on the *kabuki* music of the Kamigata region during the late Edo period

OZEKI Yoshie (Part-time Lecturer, Nara University of Education): Research on the methodology of education in Japanese music

UESUGI Koodoo (Visiting Professor, Takasaki Junior College of Arts): Acoustic and organological research on early stone and clay flutes

WADA Katsuhisa (Third head of the Kyoogoku school of *koto* music): The *wagon* zither in *Rikkokushi*, the six early national histories; Compilation of a centennial history of the Kyoogoku school

#### **Commissioned Researchers**

IZAWA Toshiharu (President of the Study Group for Enlivening the Kamigata Region): Re-

search on the *zashiki* songs of the Kamigata region: their background and metaphors

YAMADA Chieko (Part-time Lecturer, Kyoto City University of Arts): Musicological research on *gidayuu-bushi*: model patterns and the range of variation in *katari* narration

### Team Research

Long-term Projects (from fiscal 2001)

- (1) The music iconography of the traditional music of Japan

Project leader: STEVEN G. NELSON

- (2) Japanese music instruments and reconstruction

Project leader: TAKAHASHI MITO

Advisers: FUKUSHIMA KAZUO, GAMOO Satoaki, Tilman SEEBASS

Joint members: AKAISHI Atsuko, AKITA Shingo, MONICA BETHE, ENDOO Tooru, FUKINBARA Yasushi, FUKUHARA Toshio, HASEGAWA Yumiko, HIGUCHI Akira, HIGUCHI Makiko, IRIE Nobuko, IZUMI Takeo, KASUYA Makoto, KATSUMURA Jinko, KUBOTA Satoko, MIYAZAKI Mayumi, NAKAMIZO Kazue, NOGAWA Mihoko, OKADA Mariko, ONO Makoto, OOKAJI Haruhiko, SAKAMOTO Mamiko, SEKINE Toshiko, SHIMA Kazuhiko, SIMURA Satosi (SHIMURA Satoshi), TAI Ryuuichi, TAJIMA Midori, TAKAKUWA Izumi, TAKEUCHI Yuuichi, TANIMOTO Kazuyuki, YAMADERA Mitsutoshi, YAMASHITA Yuuji, YUHI Kuniko

Regular Projects (from fiscal 2000)

- (1) Texts of Japanese vocal music 1: *Jiuta-sookyoku*

Project leader: KUBOTA Satoko

Other members: IGUCHI Haruna, MANABE Masahiro, NAGAIKE Kenji, STEVEN G. NELSON, NOGAWA Mihoko, ONO Mitsuyasu, SASAKI Mika, SUZUKI Yukiko, YAMANE Michihiro

- (2) Aspects of the *hayashi* music of *dashi* festival floats

Project leader: TAI Ryuuichi

Other members: AOMORI Tooru, FUKUHARA Toshio, HIGUCHI Akira, IRIE Nobuko, IWAI Masahiro, KAKITOO Toshihiro, MASUDA Takeshi, UEKI Yukinobu, YONEDA Minoru

- (3) The lineage of the Japanese zithers: the in-

struments, documentary materials, and performance techniques

Project leader: STEVEN G. NELSON

Other members: AOKI Hiroyuki, ENDOO Tooru, KUBOTA Satoko, ISO Mizue, TSUGEI Yukio, WADA Katsuhisa

### Administrative Secretariat

Director: IMAI Hiroshi; Chief: NOMURA Mariyo;

Clerical Staff: SAIDA Noriko

### Librarian and Research Assistants

Librarian: IGUCHI Haruna

Research Assistants: IMAI Toshiyuki, ITOO Shino, MIZUCHI Manabu

### Facilities

The Research Centre for Japanese Traditional Music is situated on the 6th to 8th floors of the University's Shinkenkyuutoo (New Research Building), with a total area of approx. 1500m<sup>2</sup>.

6th floor: director's office, administration, committee meeting room, reference library, materials management room, individual office

7th floor: seminar rooms (2), instrument store-room, special collection

8th floor: individual offices (5), fellows' rooms (2), audio-visual studio, training rooms (2)

### History

1991 The need for a new Kyoto centre for research on Japan's traditional music expressed by HIROSE Ryohei at an international conference of the world's cities

1993 Expansion of the Kyoto City University of Arts proposed within the city's plans for its renewal

1996 Initial plans for the Research Centre and Doctoral Course within the graduate programme of the Faculty of Art tabled; preparatory committee for the Research Centre's founding established

1997 Budget allocated for planning the new building and surveying the site

1998 Construction begun (completed early 2000)

2000 Commencement of activities (April); opening ceremony (December 2)

---

## 編集後記

当研究センターは、20世紀に一步を踏み出し、ひとまたぎで21世紀に入った。一昨年春、京都市立芸大に、伝統音楽や伝統芸能を中心とする研究分野の核になることを目指して設立された当研究センターが、いよいよ本格的に動き出した。

所長と子ども6名の専任研究員が、この1年、適切な用語ではないかもしれないが、フル稼働した。シンポジウム、公開講座、特別研究プロジェクト、海外研究者に時期をあわせた記念講演と研究会など、新規のものもふくめたセンターの年間事業がほぼ出揃った。さらには所員の海外リポートや特別研究員からの原稿など、分厚くならざるをえない情報量である。

この1年、手ごたえ十分であったが、それぞれの事業に追いまくられて、原稿の編集作業に専念するまとまった時間がとれないまま、時が過ぎていった。

こうして勢いをつけたセンターは、この春、初めての人事異動を経験する。センターの創設期は終わった。

編集委員      長廣 比登志  
                    高橋 美都  
                    スティーヴン・G・ネルソン

京都市立芸術大学  
日本伝統音楽研究センター 所報 第2号  
2002年3月31日発行  
編集・発行人 京都市立芸術大学  
                    日本伝統音楽研究センター  
                    廣瀬 量平  
〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町13-6  
電話 075-334-2240  
FAX 075-334-2241  
E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp  
<http://www.kcua.ac.jp/jtm/>  
印刷所            西湖堂印刷株式会社

## Research Centre for Japanese Traditional Music

Kyoto City University of Arts  
13-6 Ooe Kutsukakechoo, Nishikyooku  
Kyoto, 610-1197, JAPAN  
Tel +81-75-334-2240  
Fax +81-75-334-2241  
E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp  
<http://www.kcua.ac.jp/jtm/>

---

